都留文科大学大学院紀要　第19集（2015年３月）
THE TSURU UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL REVIEW,
No.19（March, 2015）

古代ギリシアにおける教養理念に関する研究 (2)
―W. イェーガーの『パイデイア』の「序論」から学ぶ―

A Study on the ideal of culture in ancient Greece:
Learning from Introduction of Werner Jaeger's PAIDEIA

畑　　潤
Jun HATA

Ⅰ．本研究の課題と構成について

１．本研究の課題について

教養・教育論を古代ギリシア思想から説き起こすことは、教育研究としては一つの常識である。しかし、教育研究として、その思想の形成過程そのものに迫ることはあまり例がない。社会教育研究になると、その関心は近（現）代に集中し、古代ギリシア思想にまで及ぶことはほとんどない。

しかし､たとえば農民詩人ヘーシオドスの『仕事と日』や､歴史家トゥーキュディデースの『戦史』(『歴史』)、プラトーンの諸対話篇、などなどを読むと、それらが私たちの教育研究にとって不可欠なのだということが無条件に理解されてくる。

古代ギリシア文化・思想を、教育研究としてどのように学ぶのかは、教育の原理認識に関わってくる。古代学者である W. イェーガー (1888 ～ 1961) は、大著『パイデイア』において、「偉大なギリシア人たちの作品から見えてくる人間は、政治的人間（a political man）である」とし、ギリシア人が、共同社会（Gemeinschaft, community）との関係のなかで人間性（human nature）を意識し、個人の価値を見いだし、教養・教育の理念を獲得していったことを詳細に論証している。イェーガーによれば、ギリシア人が明瞭にしていった教養・教育の理念は、ギリシア文化・思想の核心になるもので、それを彼らは自分たちの共同社会の運命と闘いながら形成していったのである。イェーガーは､世界史のなかでギリシア思想が「いつもそこに立ち返る」「精神的な源」となっていく理由を、そのような形成史から問うている。

古代ギリシア（･ローマ）思想がもつ根源的な生命力は､その思想がモンテーニュ (1533 ～ 1592) の『エセー』に再生され、J.J. ルソー (1712 ～ 1778) に受け継がれたことを想起するだけで理解されるが、日本国憲法第 13 条（個人の尊重、幸福追求権、公共の福祉）や教育基本法（旧法）の前文と第 1 条（教育の目的）の成り立ちも、この古代思想（世界思想）との脈絡を抜いて考えることはできない。

さらに戦後教育研究の足跡をイェーガーの古代研究によりながら考えるとき、勝田守

一の「教育的価値」の探究世界（『教育と教育学』岩波書店､1970 年）と宗像誠也の「人間の尊さを打ち立てる」という教育の原理認識(『宗像誠也教育学著作集』第 1 巻､第 2 巻、青木書店、1974 年)、そして宮原誠一の、住民が生産と政治の主体となっていくところに学習･教養を考えつづけた実践と理論（『宮原誠一教育論集』第 1 巻、第 2 巻、国土社、1976 年～ 77 年）とを、一つのものとして学び直していくという着想を得る。今日の教育をめぐる諸矛盾の本質をつかむためには、そしてその実際上の克服を考えていくためには、原理的な認識を社会的に共有していくことが不可欠になるが、上記の三者に代表される教育本質論の内的な関連を掴んでいくことは、これからの教育研究の基本的な課題になっていくように思われる。[(1)] 世界史における教養・教育の「源」（その成り立ち）に学ぶということは、そのような課題に向かうことを可能にするということである。

私は、イェーガーの世界に学ぶこと、古代ギリシア文化・思想の古典そのものに学ぶことを重ねてきているが、下記の論文は、その成果の一端である。

- 「教育学と教養理念の起源に関する研究―W. イェーガーの『パイデイア』から学ぶ―」（都留文科大学大学院紀要第 15 集、2011 年 3 月、所収）
- 「『人間性の開花』と表現・文化活動―ヒューマニティの意識化とその継承に学ぶ―」（『月刊社会教育』2009 年 2 月号、国土社、所収）
- 「ヒューマニティの思想の現代性について―ギリシア的パイデイアー（教養）の再生を考える―」（教育科学研究会編『教育』2008 年 2 月号、国土社、所収）
- 「世界にかかわって生きることと内的なものへの憧憬と―社会教育・生涯学習の哲学を考える」（畑・草野滋之編『表現・文化活動の社会教育学―生活のなかで感性と知性を育む―』（学文社、2007 年、所収）
- 「想起に関する研究―社会教育（自己教育・相互教育）の原理をたずねて―」（都留文科大学大学院紀要第 7 集、2003 年 3 月、所収）

小論は、このような研究関心を継続している。なお、上記リストの「教育学と教養理念の起源に関する研究―W. イェーガーの『パイデイア』から学ぶ―」を (1) と考え、小論のタイトルには（2）を付した。

イェーガーの論究は、広範な資料や古典の、その細部にまで及ぶものとなっており、その理解のためには古代研究にかかわる該博な素養が必要となる。イェーガーの著述に向かうたびに、自らの素養の不足を痛感させられるのであるが、それでもその思想的洞察の行き届いた論述には格別の魅力を感じずにはいられない。その著述を短兵急に批判･評価する前に、先ずはイェーガーの見地を受けとめる努力をしてみたいと思う。

＜注記＞

(1) 大田堯の近年の著作集『大田堯自撰集成（全 4 巻)』（藤原書店､2013 年～ 14 年）は、教養・教育の原理の認識を社会的に共有していこうとする大切な成果である。この教養・教育の思想、つまり（human nature の意識化に由来する）人間の尊厳の思想を広く共有していくことが、現代民主主義の本質的な課題となっている。

２．『パイデイア』の構成と W. イェーガー

全巻の構成については、ドイツ語原文は三巻構成であるが、ギルバート・ハイエットによって英訳されたテキストは、ドイツ語原文第三巻を分割し、次のように四巻構成にしている。

第一巻「古代ギリシア」

第二巻「アテネの精神」

第三巻「神的なる核心を求めて（IN SEARCH OF THE DIVINE CENTRE）」

第四巻「プラトーンの時代における教養理念の論争」

『パイデイア』は、第一巻はドイツ語で発表されたが、二巻、三巻は、イェーガーが渡米し、英文で発表されている。そのことの歴史的経緯に関わる簡潔な説明が、イェーガー著『初期キリスト教とパイデイア』(野町啓訳、筑摩双書、1964 年）の訳者による「あとがき」でなされているが、ナチズムの支配がすすむなかで刊行されたことが指摘されている。

しかしこの渡米の経験については、イェーガーは明示的には語っていないようである。イェーガー著『ギリシャ哲学者の神学』の翻訳者である神澤惣一郎は、その訳書のあとがき「思想家としてのヴェルナー・イェーガー（訳者跋）」で、「イェーガーの渡米は、思想家の亡命の問題として大きな意味をもつものであるが、私は彼の痛みが彼の思想にどういうように影響を与えているか、反映しているかを、本書や『パイデイア』その他の著書について注意して読んでみたが、具体的には何もわからなかった。」と述べている（早稲田大学出版部、1960 年）。

イェーガーは、小論の対象である「序論」のおしまいで、「われわれの全文明（civilization, Kultur 文化）が、圧倒的な歴史的経験によって揺すぶられ、それ自身の価値を吟味し始めているという、この重大時に、古代学はもう一度、古代世界の教育の価値の検討評価をしなければならない。」と述べている。この「圧倒的な歴史的経験」（an overpowering historical experience, ein ungeheures eigens Erleben der Geschichte 途方もないそれ自身の歴史的経験）という一言に、イェーガーはどのような意味を込めていたのだろうか。

なおイェーガーの研究に関しては、岩崎允胤が、そのアリストテレース研究を「画期的」なものとして言及しており（『要説　西洋古代哲学史』大阪経済法科大学出版部、1994 年）、またさまざまな論者の研究書がイェーガーを引いているが、まとまったイェーガー研究はまだないと言うべきである。

３．本論の構成について

以下の本論Ⅱでは、イェーガー著の「序論」を 1 章から 12 章まで区分して訳出し（仮訳）、その章ごとに、＜注記と考察＞として私の注記的なものと簡略な考察事項とを付した。なお、「序論」内の章の区切りは私の判断によるもので、その章名も私が便宜的に付したものである。

本論Ⅲは、「序論」に関する私の「全体の考察」とした。

４．テキストと論述の仕方について

小論では、テキストとしてハイエット訳の英語版を用いた。ドイツ語原文の方は、

イェーガーの探究精神が鮮やかに表されているように思われるが、難解な部分が少なくない。英語訳は、ドイツ語原文のもつニュアンスという点からすると、どうしてもその一つの解釈という意味をもつことになろうが、すぐれた解釈だと判断され、この訳を用いることにした。

キータームなどは、小論の趣旨に関係してくるので、適宜ドイツ語を挿入し、その訳を付すようにした。タームだけの取り出しは危険性をもつが、できるだけ原文の文脈を確認しつつ挿入するようにした（格変化などは原文中のまま扱った）。なお、小論の訳のごく一部分は、ドイツ語原文を優先する訳とした。

小論での記述の仕方は、以下のとおりである。

・「序論」の段落は、独文と英文とでは一か所に違いがあるが、小論では英文テキストに準じる。
・テキスト中の挿入の―　　―は、そのまま―　　―で表す。
・テキスト中の（　　）は、そのまま（　　）で表す。
・テキスト中のイタリック体は＜　＞で記す。
・テキスト中の語句強調の‘　’は、そのまま‘　’で表す。
・テキスト中の古代ギリシア語、ラテン語はそのまま記し、その訳を《　》に記しておく。
・人名等については、日本社会では長く、例えば「ソクラテス」といったように長母音を短縮して表記する習慣が続いてきた。しかし小論では、古代ギリシア文化・思想に親しく触れていくために、また共有文化としての汎用性のことも考え、「ホメロス」はホメーロス、「ソクラテス」はソークラテース、「アリストテレス」はアリストテレース、…といったように表記する。
・paideia に関しては、それが主題なので、書名は『パイデイア』のままとするが、訳文と考察では「パイデイアー」と表す。

Ⅱ．「序論　教育史（the history of education, der Geschichte der menschlichen Erziehung 人間の教育の歴史）におけるギリシア人の位置」の訳と検討

１．人間の教育と共同社会（community, Gemeinschaft）

＜訳文＞

どの民族もある発展段階に到達すると、本能に駆り立てられるように教育を行なう。教育は、人間の共同社会（community, die menschliche Gemeinschaft）がその身体的、知的な特性（character, Art）を保存し伝える過程である。つまり、個々の人間は消滅していくが、その種（type, die Art）は持続する。[(1)] 世代から世代へと伝達する自然の過程は、動物や人間の身体的な特性（characteristics, Art）の永続性を保障するが、しかし人間の社会的、知的な本性は、それを創造した本来的特質（qualities, Kräfte seiner Natur 人間の本性の能力）を―つまり理性と意識的な意思を―働かせることによってのみ伝えることができる。人間はこれらの本来的特質を働かせることによって―もしわれわれが、種（species, der Arten）における有史以前の変異の理論を無視し、このわれわれのことを経験世界に限定するならば―他の生きもの（other living creatures, die übrigen Arten

der Lebewesen 他の生物の種類）には不可能な成長の自由（a freedom, einen gewissen Spielraum 一定の自由な余地）を我がものとする。よく考えられた訓練があれば、人類の身体的本性（nature, Natur）でさえ変わり得るのであり、より高度の能力（abilities, Leistungsfähigkeit《作業》能力）を獲得することもできる。しかし人間の精神は、無限にゆたかな成長可能性をもっている。人間は徐々に自分自身の力に気づいていくにしたがい、外界と内面の二つの世界についてより多くのことを学んで、自らのために最高の暮らし方（the best kind of life, die beste Form des menschlichen Daseins 人間らしい生活の最高の形態）を創ろうと努力する。肉体と精神を併せもつ人間の特別な本性（nature, Natur）は、その種（type, Artform 種の型）の維持と伝達を統括する特別な諸条件を生み、また身体的精神的な、一連の特別な形成過程を人間に課すのであるが、それをわれわれは全体として教育という名で呼ぶ。[(2)] 人間が行なう教育は、すべての自然の種 (species, Art) がそれ自身の型（type,Form）を維持し保存しようとするのと同様の、生み出し形作ろうとする活力にみちた力（vital force, Lebenswille 生の意思）によって鼓舞されるが、しかしそれは、意識された目的に到達しようとする人間の知識と意志（knowledge and will, Wissens und Wollens）による周到な努力によって、遥かにつよい力へと高められる。

これらの諸事実から、ある一般的な結論が出てくる。まず第一に、教育というものは、個人のみにかかわる仕事ではなく、それは本質的に共同社会（community, Gemeinschaft）[(3)] の一機能なのである。共同社会の性質（character, der Charakter）は、共同社会を構成する諸個人にはっきり現れるのであり、しかも人間、つまりζωον πολιτικον《社会的動物》にとっては、他のどのような動物の場合よりも遥かに、共同社会はすべての行為の源なのである。共同社会がその構成員に及ぼす人間形成的影響というものは、共同社会が、個人から成るそれぞれの新しい世代を自らにあうように教育しようと周到に力をそそぐとき、もっとも安定して活発である。どの社会もその構造は、その社会と構成員とを結びつける成文、不文の法（laws, Gesetzen und Normen 法と規範）に基づいて成っている。それゆえに教育は、いかなる人間社会 (human community)（それが家族であれ、社会階層であれ、職業組織であれ、あるいは部族や国家のようなやや広い複合体であれ）にあっても、その生き生きした＜ standard 規範＞意識（Normbewußtzein 規範意識）の直接的な表現なのである。

さて教育は、共同社会の生活や発展と歩みを共にし、また、外から課せられる変化とその内的構造および知的な発展における変容との双方によって、改められる。そして教育の基礎は、人間生活を支配する普遍的な価値意識にあるから、その歴史は、その共同社会のなかで通用している価値の変化によって影響を受けている。これらの価値が安定しているときは、教育はしっかりと基礎付けられているし、それらが通用しなくなるか壊されたときには、教育の過程は、それが機能しなくなるまで弱められる。このことは、伝統が暴力的に転覆させられるとき、あるいは内部的な衰退を経験するときにはいつでも起こる。それにもかかわらず、安定性ということが教育における健康さの確かな兆候なのではない。教育の理念は、しばしば文明の終焉を記すような老年の保守的傾向の時代に極端に安定的である―たとえば革命前の儒教の中国において、あるいは古典古代文明が終焉に向かうとき、あるいはユダヤ主義の終わりのとき、あるいは教会や芸術や学派の歴史のある時期、というように。古代エジプトの歴史は、それは数世紀ではなく数

千年として記されるが、ほとんど化石化とでもいうべき恐るべき硬直性を特徴としている。それにしても古代ローマ人たちの間でも、政治的社会的な安定性は最高の善だったのであり、革新というものはほとんど望まれも必要ともされなかったのである。[(4)]

＜注記と考察＞

(1) イェーガーの、古代ギリシアの教養理念の考究に向かう基本認識として留意しておきたい。教育が本源的にもつ社会性と個人性について、それがどのような本質を含んで成り立っているのかということが探究課題となる。その本源性を、それが孕む矛盾とともに、深く現代的に受け止めることは、教育における“自己責任”イデオロギーを批判する基本認識につながる。

(2) 人間の本性と教育との不可分性という原理が指摘されている。

(3) community は共同体とも訳し得る。しかし例えばポリス（都市国家）を「共同体」と訳すのはぴったりしない感触がある。また共同体というタームには前近代的、包括的な響きがつきまとう。このように「共同体」ということばは、私たちが家族、地域社会、市町村自治体、国家、世界の課題を考えたり、複雑な人間社会の成り立ちや関係をイメージしていこうとするときに、相応しくないように感じられる。イェーガーの「序論」でも、この語は多次元的な事象で使われているので、「共同社会」の訳で統一しておく。なお、一部で「社会」という訳語をあてた。

(4) このことは古代社会のことだけではなく、教育（制度・体制）が歴史的に示してきた本質の一面であり、諸個人を閉塞させてもいる現代日本教育の問題にも連なる。

２.「われわれの歴史はギリシア人から始まる」ことの意味

＜訳文＞

ギリシア（Greece, Griechentum ギリシア精神）は特別な範疇に位置づいている。今日から見ると、ギリシア人たちは、東方の偉大な人たちに対して一つの根本的な進歩を、つまり社会発展の新段階を引き起こしている。彼らは共同社会の生活のために、まったく新しい一連の原理を確立した。われわれが、さまざまな初期民族の芸術的、宗教的、政治的な諸達成を如何に高く評価しようとも、われわれが真に文明（civilization, Kultur 文化）―つまり理念（an ideal）を意図的に追求すること―と呼び得る歴史は、ギリシアまでは始まらない。[(1)]

この数百年の間、現代の学問は歴史の地平を途方もなく拡大してきた。ギリシア人やローマ人に知られた＜ oecumene エキュメネ＞（die Oikumene）[(2)]、つまり＜人が住んでいる＞世界は、これは２千年のあいだ全地球の境界線と同じだと考えられていたが、その中心の狭い一地域へと縮まり、また、今まで探究されていなかった知的な分野がわれわれの視界へと開かれてきた。しかし、われわれの知的な視界のこの拡張が基本的な事実を変更することはなかったということは、今日いっそう明瞭であって、つまり、特定の一民族（nation, Volk）の歴史ではなく、身体的に精神的にわれわれが属している一群の民族[(3)]の歴史に関する限りにおいて、われわれの歴史はやはりギリシア人から始まる（begins,‘beginnt’）のである。[(4)] それゆえに私は、われわれ自身の一群の民族のことをヘレノセントリック（Hellenocentric ギリシア人を中心とする）と呼んできた。

‘begins’（始まる）ということばで、私は単に時間的な始まりだけを言っているのではなく、αρχη《アルケー：始原》、つまり、われわれが新しい発展段階に到達するたびに自らを新しく方向づけていくためにいつも立ち戻らなければならない精神的な源(the spiritual source, geistiger Ursprung)という意味でも言っているのである。そのことが、歴史を通して、われわれがいつもギリシアに立ち返る理由である。しかしわれわれがギリシアへ回帰すること、つまりこの影響をわれわれが自発的に再生させることは、ギリシア人の、時代を超越して常に存在するその知的な偉大さを認めることによって、私たちが彼らに、我らに対するある権威、つまりわれわれ自身の運命とは独立しているゆえに固定され挑戦しがたいものであるというような権威を与えてきた、ということを意味するのではない。それどころか、ギリシアが何らかのわれわれ自身の生活の必要性、それは時代が異なるごとに非常に異なったものになるだろうが、を充たすから、われわれはいつもそこに立ち返るのである。[(5)] もちろんヘレノセントリックの民族のそれぞれは、ギリシアやローマでさえ、いくつかの点では根源的にそれぞれお互いに相容れないということを感じているのであって、その感じは、部分的には気質や感性に基づいているし、部分的には姿形や精神的な傾向に、また部分的にはさまざまな歴史状況の差異に基づいている。しかしその感じと、われわれが人種的にも知的にもわれわれとは異なる東方諸民族に対したときに抱く、まったく疎遠であるという感情との間には途方もない違いがあり、したがって、少なくない現代の著述家たちがするように、西欧諸民族とギリシア人、ローマ人とを、われわれを中国やインド、エジプトから区分するのに匹敵するような障壁によって区分することは、歴史的見方として疑いもなく深刻な誤りである。[(6)]

それにしても、われわれがギリシアに抱く親近感は、ある民族の本性を理解する上で人種的な要素が如何に重要であろうとも、単に人種的なものだけではない。われわれが、われわれの歴史はギリシア人から始まると言うとき、われわれは、われわれが歴史という言葉に付与している意味に確信をもっていなければならない。歴史とは、たとえば、中途半端にしか分かっていない不可思議な新しい世界の探査を含意しているのかもしれないのであり、それがヘーロドートスの歴史の考え方なのである。そのように今日、われわれがあらゆる形態（forms, Formen）の人間生活の形態学に関しより鋭い認識を持とうとするときはいつも、われわれはもっとも遠く隔たっている民族でさえ、より厳密な注意力をもって研究し、彼らの心に入ろうと試みる。しかし、この人類学らしき意味における歴史は、真の生き生きとした精神的な同族関係（spiritual kinship, schicksalhafte Geistesverbundenheit 運命的な精神的結合性）、それが一民族の内部であれ小グループの民族の内部であれ、にもとづく歴史とは区分されなくてはならない。この種の歴史においてのみ、ある民族やある時代の内的な本質の真の理解を、また観察する者とされる者との間の創造的な接触を、成し遂げることが可能となる。そしてそれによってのみ、われわれは、成熟した社会的で知的な形相や理念（forms and ideals, Formen und Ideale）というわれわれの共通の蓄えをはっきりと理解することができるのであって、このことは、諸民族からなる共存共栄の社会（one family of nations, Völkerfamilie）を作りあげる多くの異なる民族間において、これらの形相や理念がどうしても蒙らざるを得ない多種多様の変化と中断、混交と対立、消滅と再生があるのにもかかわらず、やはりそうなのである。そのような形相や理念による共同社会は、特別な意味で一方においてギリ

シアとローマとの間に存在し、他方において巨大な現代西欧諸国家（nations）の間に、個々としても集合としても、存在する。もしわれわれがこのより深い歴史概念―起源と理念による共同社会を表現するような（as expressing a community of origin and ideals, Wurzelverbundenheit 根源的な結合性）―を受け入れるならば、われわれは決して全世界を歴史調査の対象とすることはできないのであり、また我々の地理学的な地平がどれほど広く拡張されようが、われわれの歴史の極限は、過去三千年間われわれの歴史的運命をしばってきたものを超えて遡ることはできない。未来のいつかに全人類が、ここで述べてきた種類の精神的な絆で結ばれるかどうかを言うことは不可能であり、またこの問いは、今の我々の研究と何の関係もない。(7)

＜注記と考察＞

(1) civilization は「文明」と訳すほかないが、ドイツ語原文では die Kultur（文化）となっている。

(2) η　ο ι κ ο υ μ ε ν η オイクメネー　人の住んでいる地域、世界

(3)「一群の民族」は、ドイツ語原文では als Glied eines größeren Völkerkreises（より大きな民族集団の成員として）。

(4) 世界史において地理的な、知的な視野が拡張されてきても、古代ギリシア思想のもつ根源性、普遍性は変わることがなかったという認識を示している。

(5) 歴史的社会的な抑圧からの解放を希求するとき、変容していく社会のなかで新たな方向を見いだそうとするとき、あるいはさまざまな試練に当面し改めて物事を深く考え直していく必要を直観するとき、私たちは古代ギリシア思想（古典）との出会いを経験していくことになる。そのような、私たちの現代的な問いかけと古典再発見との関係が指摘されている。

(6) 勝田守一は、このイェーガーの該当箇所を紹介しながら、「…それは西欧的人間にとってなにを意味するのか。これを私たち、アジアの人間はどのようにとらえたらよいのか。そのことは、私たちが西欧文化を摂取することとどのような関係をもつのか。」と述べ、「私たちは Jaeger の課題をどう受けとめたらよいのか。」と問いの構えを示している（勝田「イェーガーの≪パイデイア≫」1962 年、『人間の科学としての教育学　勝田守一著作集 6』国土社、1973 年、所収）。イェーガーを読むとき、誰もが類似する感想を抱くだろうと思う。しかしイェーガーは、同様の古代ギリシアとアジアとの比較認識を、「序論」と本論で、繰り返し確信に満ちて述べている。私は、この問題は、いよいよ現代的な現実そのものを照らす性質をもっていると見ており、それだけにイェーガーの基本認識を、理念的問題として、現代のアジア・西欧にも遍く浸潤して在る問題として、しっかり受け止める必要があると考えるようになっている。

(7) たとえば日本の明治維新期の社会思想形成史、明治末から大正期の白樺派の諸実践と諸関係、等などを紐解くまでもなく、世界の文化は本質的に交流の中に成り立っており、深い共鳴を個人としても社会としても経験していくことになる。イェーガーのここの下りは、そのような無数の「ルネサンス」（と呼ぶべき経験）を念頭に置きながら書かれていると判断すべきだろう。

３．古代ギリシアの「教養（culture）」理念と人類学的な「文化（culture）」概念

＜訳文＞

ギリシア人が教育の歴史に占める、その革命的で画期的な位置というものは、短い文章で説明することはできない。この本の目的は、彼らの教養（culture, die Bildung）、すなわち彼らの＜ paideia（パイデイアー）＞（die Paideia）に説明を与えることであり、その特別な性質とその歴史的発展を叙述することである。それは、いくつかの抽象的な理念の総計といったようなものではなく、そのあらゆる具体的な現実性においてギリシア史そのものであった。しかしそのギリシア史の諸事実は、もしギリシア人がそれらを永遠の形相（form, Form 形相）[(1)]―彼らの最高の意思の表現であり変化と運命に対する彼らの抵抗の表現であるもの―に形作らなかったならば、とっくに世に忘れさられていただろう。彼らの発展の初期の段階においては、彼らは、この意思的行為（this act of will, Wollen 意思）の本質についてまったく見当もつかなかった。しかし彼らが、自らの歴史の道を辿り、たえずより明瞭に洞察していくにしたがい、自分たちの生活の常に今日的な目的がいよいよ生き生きと定義されるようになってきた。それは、優れた範型の人間を作り出すこと（the creation of a higher type of man, die Formung eines höheren Menschen 高尚な人間を形成すること）であった。彼らは、教育というもの（education, der Gedanke der Erziehung 教育の観念）があらゆる人間の努力の目的を体現していると信じた。それは個人と共同社会との双方が存在することに対する究極的な正当化である、と彼らは考えた。[(2)] そのことは、彼らの発展の絶頂期において、彼らが自らの本質と自らの仕事をどのように解したかを示している。われわれが何がしか優れた心理学的、歴史的、社会的な洞察によってそれらを少しは理解できるだろうという仮説には、理にかなった根拠は何もない。[(3)] 古代ギリシアの荘厳な記念碑でさえ、この光のなかでこそ最高に理解され得るのであり、何故なら、それらは同じ精神によって創造されたからである。そしてギリシア人がギリシア精神の全達成を他の古代の諸民族に遺贈したのは、究極的には、パイデイアー（paideia, der Paideia）、つまり ‘culture’（教養 , der‘Kultur’）という表し方をとってであった。アウグストゥスは、ローマ帝国の仕事をギリシア的教養（culture, Kulturgedanke 教養の観念）の見地から思い描いた。ギリシアの教養理念（cultural ideals, Kulturidee 教養理念）なくしては、古代ローマの文明は一つの歴史的な統一体（‘Antike’ als geschichtliche Einheit 歴史的な統一体としての古典期）ではありえなかっただろうし、また西欧世界の教養（the culture,‘Kulturwelt’ 教養世界) は決して存在しなかっただろう。[(4)]

われわれは culture（カルチャー , Kultur 文化・教養）という言葉を、ギリシア人中心の世界のみが保持している理念（the ideal, Ideal）を表現するものとしてではなく、ずっと瑣末な一般的な意味において、最も原初的なものであれ、世界のすべての民族に備わっている何ものかを示すものとして、使うようになってきた。[(5)] われわれはそれを、どの民族も特色づけていく、すべての生活の様式と表現の複合体の全体として用いている。このようにこの言葉は、価値的な概念（a concept of value, einen höchsten Wertbegriff 最高の価値概念）、つまり意識的に追求される＜ ideal ＞（理念、ein bewußtes Ideal 意識的な理念）ではなく、単なる人類学的な概念を意味するまでに低下してしまった。この曖昧な類比的な意味において、中国人、インド人、バビロニヤ人、ユダヤ人、エジプト

人の culture（文化）という表現をすることが許されていて、しかもこれらの民族のいずれも、真の culture（教養）と一致する一つのことばも一つの理念ももっていないのである。[(6)] もちろん高度に組織された民族はすべて教育の仕組み（system, Aufbaues 構造）をもっているが、しかしユダヤ人の法と予言者たち、中国人の儒教制度、インド人のダルマは、その知的構造の全体において、根本的に、本質的にギリシア人の教養理念（ideal of culture, Ideal der Menschenbildung 人間形成の理念）とは異なるのである。そして結局のところ、多数の前ギリシア的 ‘cultures’（文化）を語るという習慣が、どんなこともいくつかの同じことばにまとめようとする実証主義者の熱狂によって創造されたのであるが、先祖伝来のヨーロッパの記述をヨーロッパのものではない事象にまで適用する見解であり、また、歴史的な方法は、われわれの概念をそれとは性質を異にする世界に適用しようとするどんな試みによっても歪曲されるという事実を無視する見解である。ほとんどすべての歴史的な思考（historical thought, historischen Verstehens 歴史的理解）が免れない循環論法は、その基本的な誤りから始まる。それを完全に捨てることは不可能であり、何故なら、われわれは自分たち自身の生まれついた思考方法から自由になることは決してできないからである。しかしわれわれは、少なくとも歴史の基本的な諸問題を解くことができるのであり、そのうちの一つは、前ギリシア世界とギリシア人から始まる世界との間のきわめて重要な区別をはっきり理解することであり―その後者の世界において教養理念（a cultural ideal, ein Kulturideal）が形成原理として（as a formative principle, als bewusstes Gestaltungsprinzip 意識的な形成原理として）初めて確立されたのである。[(7)]

ギリシア人が教養理念（the ideal of culture, Kulturidee 教養理念）を考え出したと述べることは、おそらく大した賞賛にはならないだろう。多くの面で Kultur に飽きた（tired of civilization, kulturmüden）時代において、彼らをそんなふうに記述することは、不名誉でさえあるかもしれない。しかしわれわれが今日カルチャー（culture, Kultur）と呼んでいるものは軟白化したもの、独創的なギリシア人の理念（ideal, des Ursprünglichen 元来のもの）の最終的な変容である。ギリシア語のことばでは、それはパイデイアー（paideia, die Paideia）というよりも、果てしのない無秩序な外部的な生活用具、κατασκε-υη　του　βιου である。実際、今日のカルチャーは、独創的なギリシア人の教養という形相にいかなる価値も付与することはできないのであり、むしろ、その真の意味と方向を確立するためには、あの理念（ideal , wahren Urform 真の原型）による照明と変形が必要だと思われる。ここで言う、その原型（archetype, Urphänomen 根源現象）[(8)] を認識しそれへ回帰するということは、ギリシア人にきわめて類似した精神的構え―ゲーテの自然の哲学（philosophy of nature, Naturbetrachtung 自然の考察）、それはおそらくギリシアの歴史的直系ではないけれども、に再生する心の構え―を必ず伴う。不可避的なことであるが、ある歴史的時期の終焉に近づき、思考と習慣が硬直化し強直になってしまったとき、あるいは文明という手の込んだ機械（the elaborate machinery of civilization, veräußerlichter stumpfer Kulturmechanismus 浅薄化し切れ味のなまった文化装置）が人間の英雄的な資質に敵対しそれを抑圧するとき、硬い外皮の下で命は再び動き出す。そのような時勢のときに、深層にある歴史的な本能（historical instinct, historischer Notwendigkeit 歴史的な必然性）が人びとを、自分たち自身の民族文

化の源泉に帰るように駆り立てるだけではなく、もう一度、あのギリシア精神（彼らはそれと共通するものを非常に多くもっている）がまだ熱烈に生き、そしてその燃えるような生活から、その熱情と才能を不滅のものにした形相(forms, die Form)を創造し続けていた、あの初期の時代に生きるようにも駆り立てる。[(9)] ギリシアは、現代の文明を映し出す鏡というよりも、あるいは合理主義者の自己意識の象徴というよりも、はるかに価値のあるものである。どのような理念もその創造は（the creation of any ideal, die erste Schöpfung 最初の産物は）、あらゆる誕生の（of birth, des Ursprungs 起源の）秘密と不思議によって取り囲まれているが、日々の使用によって最上のものさえ低俗化してしまうという危険が増大するほど、人間精神のより深い価値を理解する人間は、それが歴史的な記憶と創造的な天才の始まりのときに初めて形をとった独創的な形相（forms, den Gestaltungen 形・型）にますます心を向けることになる。

＜注記と考察＞

(1) ε ι δ ο ς（エイドス）、ι δ ε α（イデアー）のことで、プラトーンの「理念」、アリストテレースの「形相」として、その哲学の根幹をなす。加藤信朗は、ギリシア哲学の本質について、「ギリシア哲学の成立とは、一口でいえば、『存在』が『かたち』として把握されたということである。」（『ギリシア哲学史』東京大学出版会、1996 年）と著書の冒頭で述べている。なお、南原繁の短歌集『形相』（初版は 1948 年、岩波文庫 1984 年）は、アリストテレースの「形相」からとられている。南原繁は教育基本法制定を含めて戦後改革期において重要な役割を果したが、その学識の素地にプラトーンと I. カントがある（畑：2007 年 4 月）。

(2) 古代ギリシアの社会においては「教育」が根底的な意味をもったという重要な指摘で、その教育が、個人と共同社会とを本質的に関係づけているという。このようにイェーガーの古代研究においては、教育は、狭義の教育的世界の問題としてではなく、共同社会の成立そのものに関わって理解されている。

(3) 社会諸科学がもつ真理接近方法の限界性が指摘されている。このことは、イェーガーが後段で歴史学の相対主義的な潮流を厳しく批判していることに連続する。本質（理念）に意識を向けるということは、現代の社会、文化を捉えていく上でもラディカル性（根源性）をもっている。

(4) ギリシア精神を遺産として後世に伝えていく上で、ギリシア的「教養」概念（「パイデイアー」）の結実が決定的意味をもった、と指摘している。

(5) ラテン語の kultūra を語源とする英語 culture は、中期英語として、疑問の余地はあるが 1440 年に「耕作、耕作された土地」という使われ方があり、およそ 1510 年に T.More の「（心身の）訓練」という使われ方が、また 1805 年に Wordsworth の「教養」という使われ方が、そして 1867 年に「文化」という使われ方が見出されるという。研究社の『英語語源辞典』（1997 年）に拠る。

(6) イェーガーの東方国家についての低い評価の仕方は、古代ギリシア思想の世界史的意義を鮮明にしようとする趣旨の反面であろう。イェーガーは、民族や国家間の優劣の問題を論じているのではなく、＜世界史としての古代ギリシア＞の成立を考えようとしている、と受け止めるのがよいだろう。

(7) イェーガーは、多くの現代的学問の潮流を批判していることになる。

(8) arche type の語源はギリシア語のα ρ χ ε - τ υ π ο ν（モデル、範型、型、原型、似姿）で、α ρ χ ε - τ υ π ο ς（最初の鋳型の）の中性形名詞用法。arche の語源はα ρ χ η（最初、起源、源）、type の語源はτ υ π ο ς（型で押した跡、鋳型、型、範型、規範、模範、など）。

(9) イェーガーは、私たちの「深層にある歴史的な本能」が、私たちを、個別の「民族文化」に駆り立てるだけではなく、人間的なものを初めて問うた古代ギリシアへと駆り立てると述べている。このような指摘からは、そのような深部の「本能」の覚醒・激励と学術・文芸そして教育とがどういう関係をもつのかという課題が意識されてくる。

４．西欧における「人格の価値」「個人」の認識

＜訳文＞

ギリシア人の教育者としての世界史的重要性は共同社会における個人の位置を彼らが新しく気づいたことに由来する、とわれわれは述べてきた。古代東洋と比較したとき、彼らはそれときわめて原理的に異なっているので、彼らの理念は現代ヨーロッパのそれと溶け合っているように見える。このことから、ギリシア人の理念は現代風の個人主義的自由の一つであったと結論することは容易い。そして実際に、現代人の個人の自己意識（sense of his own individuality, das individuelle Ichbewußtsein）の鋭い感覚と、エジプトピラミッドの陰鬱な権勢や東方の王家の墓や遺跡で明らかにされた、前ヘレニックの東方諸国家の自己否定との間以上の鋭い対比は存在し得ない。東方の、あらゆる自然の調和を遥かに越えた一人の神王の賞賛（それは、われわれとはまったく異なる形而上学的な人生観を表明している）と、東方の大部分の人びとの抑圧（それは君主のあの半宗教的な権力的高まりの系譜である）とに対し、ギリシア人の歴史の始まりは、個人の価値という新しい考え（a new conception of the value of the individual, einer neuen Schätzung des Menschen 新しい人間の尊重）の始まりであるように見える。そして、信念―キリスト教が広めようと最大限のことをなしたもの―つまりそれぞれの魂はそれ自体無限の価値をもつ一つの目的である（each soul is in itself an end of infinite value, des unendlichen Wertes der einzelnen Menschenseele 一人ひとりの人間の魂の無限の価値）という信念こそ、また、ルネサンス期とそれ以降に公然と述べられた理念、すなわちすべての個人が自分にとっての法である（every individual is a law to himself, der geistigen Autonomie des Individuums 個人の精神の自律性）という理念こそ、あの新しい考えそのものだと思うことを控えるのは困難なことである。そして、ギリシア人の人間人格の価値（the value of human character, die Würde des Menschen 人間の尊厳）の認識なくして、どうして（近代 Neuzeit が与えている：ドイツ語原文）個人の価値と重要性を要求する権利（claim, der Anspruch 請求権）が正当化され得ようか。[(1)]

ギリシア人が、その哲学的な発展の頂点において共同社会における個人の位置の問題（the problem of the individual's place, das Problem des Individuums）を明確に表し解こうとしたので、ヨーロッパにおける人格（personality, Persönlichkeit）についての歴史は彼らから始まるのに違いない、ということは歴史的に承認されるべきである。[(2)] 古代ローマ帝国の文明

とキリスト教がそれぞれに、この問いにいくらか貢献したのであり、したがってこれらの三つの影響の混合が、完全な自我という現代の個人の感覚 (the modern individual's sense of complete selfhood, das Phänomen des individualisierten Ich 個別化された自我という現象）を創造した。しかしわれわれは、現代的な見地から出発させたのでは、教養の歴史における (in the history of culture, in der Bildungsgeschichte des Menschen）ギリシア人の思想の位置をはっきりと、根源的に理解することはできないのであって、この問いには、ギリシア人の精神の特有の気質を熟考することによって迫ることの方が遥かによい。

＜注記と考察＞

(1) すでにイェーガーは、個人と共同社会とを教育が本質的に関係づけていると指摘しているが、イェーガーはここで、近現代の個人の価値の意識について、その始まりは古代ギリシアにあると述べている。「それぞれの魂はそれ自体無限の価値をもつ一つの目的である」「すべての個人が自分にとっての法である」という考え方の源は、ギリシア人の人間人格の価値の認識にあるとする、きわめて重要な内容で、近現代の人権思想、あるいは日本国憲法第 13 条（個人の尊重、幸福追求権、公共の福祉）の規定の理解に直結していくことがらである。あるいは、イェーガーの古代ギリシア理解からは、憲法･教育基本法（旧法）の思想と教育の思想との根源的な同一性を、さらには、人権思想と教育の思想との根拠の同一性を考えていく着想を得ることができる。またイェーガーの古代理解は、プラトーンの『国家―正義について―』と J.J ルソーの『社会契約論』『エミール』との関連を考えさせる。

(2) 人間の人格の理解は、共同社会における個人の位置の問題として、鮮明にされていったという重要事が述べられている。

５．観察と「自然 nature」の洞察

＜訳文＞

個人の気質 (character) の、変化に富むこと (variety)、自然発露的であること (spontaneity, spontane Munterkeit 自然に湧きおこる快活さ)、何にでも向いていること（versatility, leichte Beweglichkeit 軽やかな敏捷性)、そして自由さ（freedom, innere Freiheit 本来備わった自由さ）は、それはギリシアの人々に、非常に多くの異なる事柄できわめて急速な発展を許した必要条件であったように思われ、またそれは、最初期から最後期にいたるまでのすべてのギリシア人作家においてわれわれを感嘆させるのであるが、周到に養われた現代的な意味における主観的な資質（subjective qualities, bewußter Subjektivität 意識的な主観性）ではなかった。[(1)] それらは自然で、生まれつきのものであった。そしてそうした気質をもつギリシア人が自分たち自身の個性（individuality）を意識的に理解したのは、間接的にであって、つまり認識されるやいなや彼らに思考と行動のある新しい確信を与えた、そのような客観的な規範と法則（objective standards and laws, objektiver Normen und Gesetze）を発見することによって、そうしたのであった。東洋の見方では、ギリシアの芸術家たちがどのようにして、人間の身体を、偶然に選ばれた多数の姿勢を模写する外的な過程によってではなく、その構造、バランス、動きを支配する普遍的な原理を学ぶことによって、自由な囚われのない動きと姿勢で（in free untrammeled

motions and attitudes, die…Lösung und Befreiung 緊張のとれたゆるみやほっとした解放）うまく表現したかを理解することは不可能だろう。同様に、ギリシア人の精神の際立った無理のない（effortless, mühelos）心の平静さは、世界は一定の理解可能な法則（laws, Gesetzmäßigkeit 法則性）によって支配されているという事実（初期の民族には見えなかった）を明晰に理解することによって、生み出された。[(2)] 彼らは、自然というもの（the natural, was der ‘Natur’ entspricht ‘自然’に相当するもの）についての天賦の感覚をもっていた。‘nature’（自然）という概念（Der Begriff der Natur）―彼らはそれを作り出した（work out, geprägt haben）最初の人である―は、疑いもなく彼らに特有の心性によって生み出された。[(3)] 彼らはその考えを思いつくまでの長い間、世界を、いつもの注視の仕方、つまり世界のどの部分も残りの部分から分けられ切り離されているものとしては見ず、常に生きた全体、そこに各要素の位置と意味は由来するのであるが、その一要素として見るという注視の仕方、をもって見てきていたのである。われわれこれを有機体的（organic, organisch）見地と呼ぶが、それは個々のものを生きた全体の構成要素として見るからである。生命（life, des Seins 存在）の、自然な、成熟した、本来の、有機体的な構成を見抜くこの感覚は、現実の世界を支配する法則（the laws governing reality, der Gesetze der Wirklichkeit 現実の世界の法則）を発見し定式化しようとするギリシア人の本能―その本能は、ギリシア人の生活（life, Lebens）のあらゆる場面に、彼らの思考、彼らの演説、彼らの行為、そして彼らの全芸術に現れている―に密接に結びついている。[(4)]

＜注記と考察＞

(1) イェーガーの、古代ギリシア思想の歴史的形成過程についての見方が示されているが、彼は、あらゆる事象に潜む、主観を超えた法則を洞察していくということの必要条件として、ギリシア民族の気質という特殊性のことを説明している。

(2) もう一つの重要事、つまり、フォルムに表れた表情･感情のもつ、単なる様式以上の、思想的意味が指摘されている。

(3) 古代ギリシア人は「nature 自然」という概念を造りだした最初の人である、という重要事が指摘されている。

(4) 古代ギリシア人の、ものごとを全体と要素との関係として見るという観方と自然全体と人間（生活）に貫いて存在する法則を観ようとすることとの本質的な関連が指摘されている。

６．ギリシア文学と論理学、文法、修辞学、そして哲学

＜訳文＞

芸術作品を構成したり見たりするときのギリシア人の独特な方法は、まず何よりも美的天分であって、それは見るという単純な行為に基づいており、ある理念（an idea, Idee）を芸術創造の王国へ意図して移すということに基づいているのではなかった。彼らが芸術を理想化し（idealized, die Idealisierung）、ある知的な態度を身体的美的行為と混ぜたのは、彼らの歴史において比較的後のことであり、紀元前５～４世紀の古典期のことである。もちろん、われわれが彼らの美的な感覚は自然で無意識であったというとき、なぜ彫刻について真実であるのと同じことが、文学においても真実であるの

かは、まだ説明していないのであって、つまり文学では芸術性は視覚にではなく、ことばと感情（emotion, des inneren seelischen Vorgangs 内的精神的事象）との相互作用に依拠しているのである。ギリシア文学において、われわれはギリシア彫刻と建築におけるのと同じようないくつかの表現形式原理（principles of form , Formprinzipien）を見出す。[1] われわれは詩ないし散文の作品の造形的、建築的な特質のことを話している。しかしそのように述べる特質は、彫刻や建築から＜ imitated 真似られた＞構成的な価値（structural values, Formwerte 組み立ての価値）のことではなく、言語とその構成（structure, Aufbaus）における＜ analogus 類比的な＞諸規範 (standards, Normen) のことである。われわれはこの比喩を、われわれが彫像や建造物の構成的な原理をより生き生きと、したがってよりすばやく把握するという、ただそれだけの理由で使うのである。ギリシア人によって使われた文学表現形式（the literary forms, die Litaraturformen）は、そのあらゆる多方面の多様性と入念な構成を伴いながら、人間が言葉でみずからを表現するほんのわずかの簡単な表現形式の置き換えから、芸術と表現様式（style, Stil）の理念的な（ideal）領域へと有機的に成長した。[2] 弁論術においてもまた、彼らの、複雑な計画を実行し、多くの部分からなる一つの有機体的統一体を創造する能力は、純粋に単純に天性の直覚する力（a natural perception, dem natürlichen Gefühl 天性の感受性）に由来し、それは次第に鋭くなって感情と思考と話すことを支配する法則（the laws, das Gesetzmäßige 法則性）を直覚する（wachsenden Sinn 成長した感受性）のであるが―その直覚力が、最終的には（抽象的、専門的になり）論理学と文法と修辞学とを創造したのである。[3] この点で、われわれがギリシア人から学ぶことは多くあったが、その彼らから学んできたものは、未だに文学と思考、表現様式（style, Stilformen）を支配している厳密で不変な一連の表現形式（set of forms, der eiserne Bestand ゆるぎないもの）なのである。

このことは、ギリシア人の精神のもっとも奇跡的な創造物、つまりその比類のない構成（structure, Struktur）のもっとも雄弁な証である哲学にさえ適用される。[4] 哲学において、ギリシアの芸術と思想の表現形式（forms, -form）を生み出した力は、もっともありありと示された。それは、自然と人間生活のあらゆる出来事と変化の根底にある恒久不変の規律（rules, Ordnungen）を明瞭に直覚すること（perception, Blick 見抜くこと）である。[5] どんな民族も法のおきて（a code of laws, Gesetze）を生み出してきたが、しかしギリシア人はいつもすべてのものに染み渡る一つの法則（Law, ‘Gesetz’）を捜し求め、自分たちの生活と思考をそれと調和させようとした。彼らは世界のなかの哲学者である。[6] ギリシア哲学における＜ theoria ＞ （観照、理論[7]）は、深く本来的にギリシア芸術とギリシアの詩に結びついていたのであり、何故ならそれは、理性的な思考、われわれが先ず考える要素であるが、を言い表すだけではなく、すべての事象を一つの全体として理解する、あるいはすべてのものに＜ idea イデア＞―つまり目に見える型（pattern, Gestalt 形）を見る、（その名が意味する）視力（vision 洞察力 , des Schauens 見ること、眺めること）をも言い表したからである。われわれは、たとえ後の段階で初期の段階のことを一般化したり解釈したりすることの危険性を知っているとしても、プラトーンのイデアー―まったく比類なく明確にギリシア的な知的産物である―は、他の多くの点でギリシア人の精神性を理解する手がかりなのだということを了解せずにはいられない。とくに、ギリシアの彫刻と絵画をとおして表れている型を与えようとする性

向（tendency to formalize, der beherrschenden Formtendenz）は、プラトーンのイデアーと同じ源に発した。その関連は、古代においてさえ認められ、それ以来しばしば観察されてきたのであるが、同じことがギリシアの雄弁術においても有効であり、そして実のところギリシア人の基本的な知的態度を貫いてそうなのである。たとえば、もっとも早い時期の自然哲学者たちは、宇宙を一つの法則によって支配されている全体として見ようと努力したが、計算し、実験し、経験を偏重する現代の科学者たちとは、完全に対照的である。彼ら自然哲学者たちは、分離された結果の一連を要約し、それらを一つの抽象的な結論に組織化するというやり方で仕事をしたのではなく、はるかに超え出て、分離している個々の事実を、一つの全体の部分としての位置と意味を与えるある一般的な概念によって解釈したのである。ギリシア人の音楽、数学を、今日知られている限りの早期の諸民族のそれと区別する、普遍的な範型を構成する（construct universal patterns, Ideeförmigkeit 理念形性）ということも、この性向であった。

＜注記と考察＞

(1) たとえば、ホメーロスの『イーリアス』『オデュッセイア』、ヘーシオドスの『仕事と日』などを思い浮かべればよい。

(2) ほんのわずかの簡単な表現形式（the bare simple form, der einfachen und schlichten Naturformen 単純で簡素な自然な表現形式）から芸術へと成長していく過程の指摘。

(3) ギリシア人の文学表現形式の深化、つまり認識の深化と、論理学、文法、修辞学が成立していく本質的経緯についての説明。

(4) ギリシア人の芸術と思想の表現形式の深化と哲学との関係。

(5) 自然と人間生活の現象の根底に法則性があることを認める、という重要事。

(6) 根源の存在を洞察し、自らの生活と思考をそれに沿わしめようとした、ギリシア人の態度の世界史的な画期性。

(7) θεωρια テオーリアー：見ること、観照、探究、理論。theory の語源である。ギリシア芸術と哲学とは、型（pattern, Gestalt 形）を見る、という同一の心性をルーツとする。

７．教育とは人間の人格（human character）を理念（ideal）にしたがって形成する（moulding）こと

＜訳文＞

教育史上のギリシア精神の比類ない位置は、同様のまれな特質（characteristic, Eigentümlichkeit）、すなわちすべての部分を一つの完璧な全体に対し従属的で相対的なものとみなす優れた天分―というのは、ギリシア人はその観方を芸術のみならず生活に持ち込んだのである―と、また彼らの普遍（the universal, das Allgemeine）についての哲学的感覚、すなわち人間性（human nature, menschlichen Natur）についてのもっとも深い法則（laws, Gesetze）を直覚する力（perception, erfassenden Sinn）、またその原理に基づいて個々人の精神生活と社会の構成（the structure, des Aufbaus）を支配している規範（standards, Normen）を直覚する力、とに基づいている。というのは（ヘラクレイトスによって、心の本質への鋭い洞察力をもって理解されたように）[(1)]、普遍的なもの、

＜ logos ロゴス＞（理性、道理）は、法が国家においてすべての市民に対するように、すべての心に共通だからである。[(2)] 教育の問題に接近するとき、ギリシア人は、人間生活を支配する自然の原理（the natural principles, der natürichen Prinzipien）と、人が自分の身体的なあるいは知的な力を働かせるときに使う内在的な法則（laws, Gesetze）とをこのように明瞭に理解することに、全面的に信頼を置いた。そのような知識を、教育における形成力（formative force, gestaltende Kräfte）として使用すること、またそれによって生きている人間を、陶工が粘土をこね、また彫刻家が石を刻むように、前もって意識した形にすること―そうしたことは、芸術家であり哲学者であるあの民族によってのみ発展させることのできた大胆で独創的な着想であった。彼らが創作すべきもっとも偉大な芸術作品は、人間であった。彼らは、教育とは人間の人格を理念に従って意図的に形成すること（deliberately moulding human character in accordance with an ideal, ein Prozeß bewußten Aufbauens 意識的な建設の過程）を意味するということを認識した最初の人である。[(3)]‘ 手や足や心が一点の欠陥もなく堅固に作られている ’―これは、マラトンとサラミスの時代の一詩人が、獲得することがむつかしいあの真の徳の本質を叙述している言葉である。[(4)] この種類（type, Art）の教育のみが、教養（culture, Bildung）の名に値するのであって、この種類のために、プラトーンは人格を＜ moulding 造型する＞という物質的な比喩を用いている。[(5)] ドイツ語の＜ Bildung 教養＞は、明確にギリシア人の教育の本質、つまりプラトーン的意味を示しているが、その理由は、それが、芸術家の（artist’s, dem Bildner 彫刻家にとっての）彫刻制作の行為と、彼の想像力に浮かぶ導きの（guiding, normativ 規範的な）範型（pattern, Bild 像）、つまり＜ idea イデアー [(6)] ＞（理念）あるいは＜ typos テューポス [(7)] ＞（範型）との双方を包含しているからである。歴史を貫いて、この概念が再現する（reappears, auftaucht《思いがけなく》現れる）ときはいつでも、それはギリシア人から受け継いでいるのであって、それは、若者を動物のように一定のはっきりと限定された外的な義務を遂行させるように訓練するという考えを捨て去り、教育の本来の本質を思い出す（recollects the true essence of education, sich auf das eigentliche Wesen des Erziehens besinnt）ときには、いつも再現する。[(8)] しかしギリシア人が、教育という仕事が実に重要で実に難しいと感じ、また彼らが、未曾有のつよい衝動によってそれへと引き付けられたという事実には、ある格別な理由があったのである。それは、彼らの審美的な視力（aesthetic vision, künstlerischen Auge）に帰されるべきでも、彼らの ‘theoretic 理論的 ’[(9)] な心性に帰されるべきでもない。われわれは、彼らを最初に一瞥しただけで、彼らの思考の中心に人間が居るということがわかる。彼らの擬人観的な神々。あるいは、彼らの、彫刻における、さらには絵画においてさえ見られる、人間の姿を表現するという課題への集中。論理的な連続性については、それによって彼らの哲学は宇宙の問題から人間の問題に移行し、またそこにおいて、彼らの哲学はソークラテース、プラトーン、アリストテレースによって絶頂に達した。彼らの詩人については、ホメーロス以降の諸世紀を貫いて、彼らの尽きぬテーマは人間、つまり人間の運命であり、人間の神々である。最後に彼らの国家（state, Staat）であるが、これは、人間と人間の全人生（man’s life, seines ganzen Lebens 人間の全人生）を形作った力（force which shaped, Former 形成者）として眺められなければ、理解され得ない。これらすべてのことは、同じ一つの偉大な光から分かれたさまざまな光線である。それらは、人間

中心的な生き方（anthropocentric attitude to life, eines anthropozentrischen Lebensgefühls 人間中心的な人生の感じ方）の表現であり、何か他のものを原因や由来としては説明され得ないのであって、ギリシア人によって感じられ、作られ、考えられるすべてのものに染み渡っているのである。他の諸民族は、神々や王、超自然的存在（spirits）を作ったが、ギリシア人のみ、人間をつくった。[(10)]

＜注記と考察＞

(1) ヘラクレイトス：紀元前 540 年頃～ 470 年頃。小アジアのエペソスの哲学者。

(2)「λογος ロゴス」（言葉、対話、分別、理性、道理、原理）を、「普遍的なもの」（the universal, das Allgemeine）、すべての心に共通なもの（common to all minds）として捉えたという重要事。

(3)「教育とは意識的な建設の過程（ein Prozeß bewußten Aufbauens）である」という認識、つまり設計図を思い描いて建設していくという考えは、（自己教育を含む）教育実践の成立の根幹に該当することがらである。教育基本法（旧法）の、「教育は人格の完成をめざし、…」にはじまる第一条（教育の目的）の規定は、古代ギリシア思想にまっすぐに通じる。

(4) シモーニデース：紀元前 556 年頃～ 468 年頃。エーゲ海のケオス島のイリウスに生れた代表的な抒情詩人。プラトーンの対話篇『プロータゴラス』に、次のようなシモーニデースの詩の引用がある。

「まことにすぐれた人になることこそはむずかしい
　手足　心が完全で　非の打ちどころのない人となることは」
（藤沢令夫訳『プロタゴラス―ソフィストたち―』、岩波文庫）

なお、マラトンの戦い（第一次ペルシア戦争）は紀元前 490 年、サラミスの海戦（第二次ペルシア戦争）は紀元前 480 年。

(5) ドイツ語原文には注記があり、そこでは、プラトーンの『国家』（377B）などで使われているπλαττειν プラッテインの用法を指摘している。πλαττω プラットーは、「捏ねて造る、造形する、（心の中に）形造る、想像する」などの意味がある。

なお、『国家』の該当箇所を短く引用しておくと次のようである。

「…とりわけその時期にこそ形づくられる（πλαττεται, moulded）のだし、それぞれの者に捺そうと望むままの型がつけられる（τυπος, stamp）からだ」「…そのようにして、手を使って子供たちの身体を丈夫に形づくることよりも、物語によって彼らの魂を造型する（πλαττειν, shape）ことのほうを、はるかに多く心がけさせることになるだろう。…」（藤沢令夫訳、岩波文庫, 挿入したギリシア語、英語は、ロエブクラシカルライブラリに拠る）

(6) idea, ιδεα イデアーは「形、姿、様態、（文学等の）形式、（プラトン哲学で）理想形、原型、イデア」など。

(7) τυπος テュポス（型、範型、模範、規範、類型、彫像、似姿、姿）は、ラテン語を経て、ドイツ語の Typ, 英語の type となる。

(8) この問題状況は世界史的に繰り返され、今日の日本の教育も例外ではない。

(9) theoretic は、θεωρειν テオーレイン（見る）からくるθεωρητικος

テオーレーティコス（観察し得る、考察する、観想の、理論的な）を語源とする。

(10)「人間中心的（anthropocentric, anthropozentrisch）」、つまり人間へのつよい関心のことであり、人間を観察し、人間を意識的に探究すること、human nature を洞察していくこと、教育をそれに基づいて考えていくこと、などを意味している。ここでの「人間中心的」は、「神中心的（theocentric）」に対する意味ではない。

８．古代ギリシアのパイデイアーπαιδεια、ローマのフーマーニタース humanitas、そしてヒューマニズム humanism

＜訳文＞

われわれは今や、オリエント（東方）との対比において、ヘレニズム[(1)]の特別な性格を明確に述べることができる。人間の発見というが、ギリシア人は主観的な自我を発見したのではなく、人間性の普遍的な法則（the universal laws of human nature, der allgemeinen Wesensgesetze des Menschen 人間の普遍的な本質的法則）をはっきり理解したのである。ギリシア人の知的な原理は、個人主義ではなく、そのことばを元来の古典時代の意味で使って、‘humanism ヒューマニズム’（‘der Humanisumus’ ヒューマニズム）である。[(2)] それは、＜humanitas フーマーニタース＞[(3)] から来ているが、それは、少なくともウァルロ[(4)] とキケロー[(5)] の時代以来、ここでは問題にならない人道的（humane, Humanitären）行為というその古い時代の通俗的な意味に加えて、より高貴で厳格な意味をもっていた。これは、人間をその真の（true, wahren）形相（form, Form）へ、つまり真の本来の人間性（the real and genuine human nature, dem eigentlichen Menschsein）へと教育する過程を意味した。これが、ローマの政治家に手本として取り入れられたギリシアの真正の（true, echte）パイデイアーである。[(6)] それは理念（the ideal, der Idee）から発しているのであって、個人（the individual, dem Einzelnen 一人ひとり）からではない。群れ（the horde, Herdenwesen 群れ的存在）の一員としての人間の上に、あるいは独立しているといわれる個人としての人間の上に、人間は一つの理念（an ideal, Idee）として立つのであるが、その理念は、ギリシアの詩人たち、芸術家たちや学者たちのみならず、ギリシアの教育者たちがいつも目を向けてきた範型（pattern）なのであった。しかし、理念としての人間とは何か。それは、誰もが模倣するように義務づけられている、普遍妥当な人間像（model of humanity, Bild der Gattung《人》類の像）である。[(7)] われわれは、教育の本質は一人ひとりを共同社会（community, Gemeinschaft）の形（image,Form）に合うようにつくる（make, die Prägung 型押しする）ことだと指摘してきたのであるが、人間の人格をあの共同のひな型（model、Bild des Menschen 人間像）にもとづいて形作ることから出発したギリシア人は、いよいよその過程の意味を意識するようになり、そしてついに、教育という問題に深く立ち入って、歴史におけるどの時期のどの民族よりも一層しっかりとした、一層哲学的な理解力をもって、その根本的な原理（basic principles, Grundsätzlichkeit）を掴んだのである。[(8)]

＜注記と考察＞

(1) Hellenism：古代ギリシアの精神・思想・文化

(2) humanism、der Humanisumus は、「人文主義」あるいは「ヒューマニズム」と訳される。

この二つの訳語は、両者の本質的関係を示しているが、具体的にどちらの訳語をあてるかは簡単ではない。小論では、人間性の探究という意味合いをつよく感じさせる場合は「ヒューマニズム」と訳し、ギリシア・ローマ古典そのものへの関心をつよく感じさせる場合、あるいは歴史的にそのような思想潮流を意味する場合は「人文主義」と訳すことにする。また念のために、それぞれに英語、ドイツ語を付しておく。

(3) hūmānitās：人間性、人道、教養、文化、文明、など。英語の human は hūmānus（人間の）に由来する。

(4) ウァルロ：紀元前 116 ～ 27(?)。ローマの学者。キケローの友人で、ユリウス・カエサルに仕えてもいる。

(5) キケロー：紀元前 106 ～ 43。ローマの政治家・弁論家・哲学者。

(6) 古代ギリシアのパイデイアー（教養）が、古代ローマのフーマーニタースの思想として継承され、それがヒューマニズムの源となる。

　イェーガーは本論で、パイデイアーの成り立ちの重要な局面として、それを「教育者」（家庭教師）としてのソフィストたちの「教育」の成立とともに論じており、人間性の意識化とそれを意識して育む教育（実践）の成立とが本質的に一体的なものであったことがわかる。

(7) この箇所の英文と独文は次のようである。

【It is the universally valid model of humanity which all individuals are bound to imitate.】

【der Mensch als allgemeingültiges und verpflichtendes Bild der Gattung】

（普遍妥当で義務となる類《Gattung》の像としての人間）

　ここでの「類」は、人「種」ではなく、人「類」と解すればよいだろう。「類の像」とは「人間像」ということになる。

(8)「一人ひとりを共同社会の形に合うようにつくること」から出発した古代ギリシア人の教育の理解が、人間の人格を「普遍妥当な人間像」を目指して育むことという原理的認識に到達した、という重要な指摘である。

９．ギリシア人がつかんだ人間人格の理念（ideal）の歴史性とローマ帝国における「クラシカル classical（古典的）」の成り立ちについて

＜訳文＞

　彼らが個々人を教育して獲得するよう望んでいた人間人格の理念（the ideal of human character, das Menschenideal）は、時空の外に存在するような空虚な抽象的な範型（pattern, Schemen ひな型）ではなかった。それはまさにギリシアの土壌に成長してきた生き生きとした理念（ideal, Form 形相）であり、その歴史と知的発展のあらゆる段階を同化しつつ、変化する民族の運命の起伏とともに変化した。このことは、われわれよりも早い世代の古典主義者（classicists, Klassizismus 擬古典主義）[(1)] や人文主義者（humanists, Humanismus 人文主義）には認識されなかったのであり―つまり、彼らは歴史を無視し、ギリシアや古典古代の ‘humanity 人間性’（Humanität）や ‘culture, 教養’（die Kultur）、‘mind 精神’（Geist）を、絶対的な時間を超越した理念（ideal, Menschentum 人間性）として解釈したのである。もちろんギリシア民族は、その後継者たちに、精神の王国における（in the realm of the spirit, in unvergänglicher Form 不滅の形相における）非常に多くの不滅で

不変の諸発見を伝えた。しかし、個人の人格をある理念的な基準に基づいて形成するということは、もしわれわれがその基準を永遠に固定された究極的なものであると思い描くならば、われわれがギリシア人の意思であると評してきたことのもっとも危険な誤解となろう。ユークリッドの幾何学とアリストテレースの論理学は、心の働きにとって（for the operation of the mind, des Menschengeistes 人間精神の）、今日でさえ色あせることのない一連の原理（principles, Grundlagen 基礎）であり、おそらく横に置くわけにはいかない。それでも、普遍的に有効とされ、あらゆる時間的内容を一掃されたこれらの知的な法則でさえ、ギリシア人の科学によって創造されたのであり、歴史的な目をもって見るならば、徹頭徹尾ギリシア人的なものであり、したがって他の思考と観察の数学的、論理的な原理との共存を排除するものではない。そしてこのことは、ギリシア人の精神による他の諸作品については、なおさら真実であって、それらはやはりそれらを作った時代と民族の特質を表しており、ある明確に限定された歴史状況に直接つながっているのである。

ローマ帝国の初頭に生きたギリシアの批評家たちは、ギリシアの偉大な時代の諸傑作を、時間を超越した意味での ‘classical クラシカル（古典的）’（classisch 古典的な）だと―つまり部分的には、続く芸術家たちが模倣すべき正式の模範（formal patterns, Musterbilder）だと、また部分的には、後世の人びとが従うべき倫理的な手本（model, Vorbilder）だと評した最初の人びとである。ギリシアの歴史が世界的なローマ帝国の生活の一部となったあの時、ギリシア人が独立した一民族であることは終わったのであり、したがって彼らがなお追求することができた唯一の高尚な理想（higher ideal, der Lebensinhalt 生きがい）は、自分たち自身の伝統を保存し尊崇する（veneration, die Verehrung）ことであった。[(2)] それで彼らは、古典主義者の（the classicist, jener klassizistischen あの擬古典主義の）心の神学―あの独特な型（type, die Prägung）の人文主義（humanism, den Humanismus）の、道理にかなった記述―を発展させた最初の人となったのである。彼らの審美的な＜ vita contemplativa 観想的な生活ぶり＞は、現代の人文主義者（humanist’s, Humanisten-）や学者の生活の原型であった。双方の生活は同じ原理に、つまりどのような民族であれその悩める運命の遥か高くにある、永遠の真実と美の領域としての、抽象的で時間を超越した心の概念（conception of the mind, Begriff des Geistes）に基づいている。同じように、ゲーテの時代のドイツの人文主義者たち（humanists, Neuhumanismus 新人文主義）は、ギリシア人を、ある明確に限定された一回限りの歴史の期間に現れた真の人間性の完璧な示現（manifestation, Offenbarung）と見なしたのであるが―これは、実は彼らの学説が刺激を与えて生まれた、その新しい歴史観よりも、‘age of enlightenment 啓蒙の時代 ’ の合理主義に近い態度である。[(3)]

＜注記と考察＞

(1) 擬古典主義：ギリシア・ローマで作られたものを「古典的」とし、それを模倣したものを擬古典主義的（classicistic）とする場合の使い方とされる。

(2) ギリシア民族の国家が政治的実態を失うという歴史的局面で、いわば歴史を超越するような「クラシック」意識が成立した、という指摘。

(3) 現代の人文主義についてのイェーガーの基本的な観方が示されており、重要。ここ

での、ドイツの新人文主義批判として生まれたとする「新しい歴史観」とは、没価値的、実証主義的な歴史科学の潮流と判断され、したがって、新人文主義そのものは、「新しい歴史観」よりは、理性を重視し人間の尊厳の自覚を促す、啓蒙の時代の「合理主義（the rationalism）」に近い、とする。ここでイェーガーが思慮していることは（古典古代の評価の仕方については次章でさらに立ち入って述べられるが）、現代の学術・文化、そして教育の思潮の骨格をめぐる問題として、本質性を失わない。

10. 人間の政治的性質と humanism（ヒューマニズム）

＜訳文＞

1 世紀にわたる歴史研究（historical research, geschichtlicher Forschung）は、古典主義（classicism, zum Klassizismus 擬古典主義）が衰退したのに対し勢いを増し、今や我々をあの見解から切り離す。今日われわれが、古典古代の永遠の価値に回帰することによって、反対の危険―すべてを際限も目的もない歴史（history, Historisums 歴史主義）として見ようとする情熱、つまりすべての猫が灰色になる夜のようなもの―に対抗する場合、やはりわれわれは、二度とそれらを、時代を超越した偶像として掲げることはできない。それらは、―まさにそれらが創造されたときの時代で作用したような―そのような、ある明確に限定された歴史的な環境のなかで働く諸力のようなもの除いて、その意味に含意されている規範（standards, maßgebenden Gehalt 指導的な内容）と、われわれの生活を変容し形成しようとする抗しがたい力とを見せることはない。(1) われわれはもはや、ギリシア文学の歴史を、＜ in bacuo 空の状態＞で、つまりそれを生みそれを受け取った社会から切り離された状態で、読んだり書いたりすることはできない。ギリシア人の精神の卓越した強さは、それが共同社会の生活に深く根ざしていたという事実に負っている。(2) その作品（work, Erzeugnissen 諸作品）で明らかにされているすべての理念（ideals, die Ideale）は、それらの理念を創造し、またそれらを美的形式へと変えた人々によって、あの力強い個人を超えた生活から汲み上げられたのである。偉大なギリシア人たちの作品（work、Werken）から見えてくる人間は、政治的人間（a political man, der politische Mensch）である。(3) ギリシアの教育は、一人の完璧な、独立した個人（a perfect independent personality, die selbstgenugsame Vervollkommnung des Individuum 自足した完璧な個人）を創造することを意図する私的な多くの技術や技能の総計ではない。そうだとは、ギリシアの国家自体が消えるヘレニズムの凋落のとき―現代の教育学が直接的に由来する時代―までだれも思わなかった。ドイツの古典主義者たち（classicists）が、ある非政治的な時代に生きながら、なぜあの信念を追求したのかを理解することは容易い。(4) しかし国家へのわれわれ自身の知的関心は、われわれの眼を、ギリシアの最高の時期でさえ国家無しの精神（mind,Geist）は精神無しの国家と同じように不可能だったという事実に開いたのである。ギリシア精神（Hellenism, Griechentums ギリシア精神）の比類のない偉大な諸作品（works, Werke）は、ホメーロスの叙事詩に歌われる英雄の時代からプラトーンの教育的国家、そこにおいて個人と共同社会とが哲学の領域で最後の決闘を闘ったのであるが、まで途切れることなく発展した、独特な国家の考え方（sense of the state, Staatsgesinnung）の記念物である。いかなる未来のヒューマニズム（humanism, Humanismus）も、すべてのギリシアの教育の基本的な事実―ギリシア人に

とって人間性は、いつも人間存在の本質的特質（the essential quality of a human being, die Humanität,das‘Menschsein’）、つまり人間の政治的な性質（his political character, die Eigenschaft des Menschen als politisches Wesen 政治的存在としての人間の特性）を含んでいたという事実―に基づいて建設されなければならない。もっとも偉大なギリシア人たちはいつも自分たちが共同社会の奉仕者であると感じていたということは、創造的、芸術的、知的な生活と共同社会との間の密接な関係の一つの目印である。この態度は東洋においても良く知られているが、それは、生活が厳格な半宗教的な規則によって組織されているような国家においてはきわめて自然のように思われる。しかしギリシアの偉大な人びとは、神のことばを口にするためにではなく、人びとに自ら知っていることを教えるために（to teach the people what they themselves knew, als selbständige Lehrer des Volkes 民衆の自主的な教師として）、また自分たちの理念に形を与えるために（to give shape to their ideals,　als…Gestalter ihrer Ideale 彼らの理念に形を与える人として）、現れ出た。彼らは、宗教的な霊感の形式で（in the form of, in der Form）語るときでさえ、彼らはその霊感を自分の知識と自分の形（form, Gestaltung 形）に翻訳した。しかし、それは形（shape, Form）と意図において個人的であったかもしれないが、彼ら自身はそれをすっかり、否応なく、社会的と感じた。[(5)] ギリシアの、詩人、政治家、賢人（ποιητης，πολιτιχος，σοφος）の三位一体は、国民の（nation’s, der Nation）もっとも理想的な指導者層を体現した。あの精神的自由（spiritual liberty, inneren Freiheit 内面の自由）の環境のなかで、深い知識に拠り（あたかも神の法に拠るかのように）共同社会の奉仕に結びつけられて、ギリシアの創造的な天才は、自分たちを、われわれの個人主義的な文明の非常にすぐれた芸術的、知的な才気（brilliance, Virtuosentum 巨匠気質）よりもはるかに高い位置に置く、あの高遠な教育理念を着想し、獲得したのであった。[(6)] これが、古典ギリシア文学を純粋に美的な範疇、そのような範疇で多くの人が古典ギリシア文学を理解しようとしてきたが無駄だったのである、から引き上げるのであり、またこれが古典ギリシア文学に、それが数千年間発揮してきた人間性への測り知れない影響力というものを、与えているのである。

＜注記と考察＞

(1) イェーガーがここで強く述べている、古典古代の価値の評価の仕方は、私たちの教養探究の基本姿勢に関わってくることがらである。

(2)「ギリシア人の精神の卓越した強さは、それが共同社会の生活に深く根ざしていたという事実に負っている」という重要な指摘。ここでは古代ギリシアの思想・理念の成立の過程が述べられているが、私たちは同様のことを、継承の過程、あるいは教育のこととして考えるべきなのだろう。

(3) ギリシア的教養に見る人間を、端的に「政治的人間」と表しており、イェーガーのパイデイアー研究の基本的観点となるものである。この観点は、たとえば教養主義批判の原理ともなるが、教養・知性を、その成り立ちに関わって、共同生活との関連で探究していくという課題を示している。

(4) ドイツ文学の古典期（Klassik）のギリシア愛好（der Phihellenismus）のことが述べられている。

(5) ここの前後で、「精神的自由（inneren Freiheit 内面の自由）」と「深い知識（das Wesenswissen 本質的な知識）」と「共同社会の奉仕（dem Ganzen 全体）」との内的な関係が、古代ギリシアの歴史的経験として述べられている。このような理解の教育理念は、国権主義的な観方、個人主義的な観方と原理的に対比されるものである。

(6) 該当するドイツ語原文は次のよう。

【,ist das Schöpfertum der Griechen zu seiner erzieherischen Größe emporgewachsen,】

（ギリシアの創造者は成長してその教育上の偉大な存在になった）

11. 古代ギリシアにおける教養の歴史と文学の歴史との一致

＜訳文＞

ギリシア人の芸術は、実情は、そのもっとも偉大な時期の、もっとも高貴な諸傑作（noblest masterpieces, höchsten Werken）において、われわれへのあの影響力という点でもっとも強い役割を果たしている。つまりわれわれは、そのときどきにギリシア人の生活を支配した理念（ideals, der Ideale）の反映と考える、そのようなギリシア芸術史が必要なのである。ギリシア文学だけではなくギリシア芸術にも、紀元前４世紀末まで本来それが共同社会の精神の（of the spirit of the community, des Gesamtgeistes 全体の精神の）表現であるということは当てはまる。いったい誰が、例えば、ピンダロス[(1)]の勝利の賛歌によって呼び起こされる競技の理想像（the athletic ideal, des agonalen Mannesideals 体育競技の人間の理想像）を、オリンピック勝利者を具体化した姿として示す彫像を知ることなしに、あるいは、人間に可能な身体的、精神的な完全性（the physical and spiritual perfection possible to man, Würde und Hoheit menschlichen Körper- und Seelenadels 人間の身体的精神的高貴さがもつ気品と崇高）について全ギリシア人が感じたことを具現化している神々の彫像を知ることなしに、理解することができるであろうか。ドーリス式寺院は、疑いようもなく、ドーリス人の性格と、それぞれの個々の部分を妥協のない緊密な一つの全体に厳格に従属させようとするドーリス人の理想が残した、もっとも雄大な記念碑である。[(2)]それは、その記念碑が永遠性を与えている失われた生活とその記念碑を作らせた宗教的信念を、ありありと思い浮かばせるのに、まだ非常な力をもっている。しかしパイデイアーの真の担い手は、ギリシア人たちの考えでは、声をもたぬ芸術家たち―彫刻家（sculptor, des Bildhauers 彫刻家）、画家、建築家―ではなく、詩人や音楽家であり、雄弁家（政治家を意味する）や哲学者たちであった。ギリシア人たちは、立法者はある点で造形芸術家（the plastic artist, der bildende Künstler 造形芸術家）よりも詩人により近いと感じたのであるが、それは、詩人も立法者も教育的な役目（an educational mission, Erziehertum 教師性）をもっていたからである。教育者（der Bildner）のみが、彼は生きている人間を形成する（formt）のであり、その称号に対する特別の請求権をもっていた。[(3)]しばしばギリシア人が教育の行為を造形芸術家の（of the plastic artist, des plastischen Künstlers）仕事と比較するとき、彼ら自身は、自分たちの芸術的本性にもかかわらず、一人の人間が、ヴィンケルマン[(4)]がしたように、芸術作品を見ること（looking at, der Anschauung 見ること）によって教育され得るなどとはほとんど考えなかった。彼らは、心を形成する（form the soul, seelenformenden）ことができる最適の正真正銘の力は言葉（words, Wort）と響き（sounds, Ton）であり、そして

―その力が言葉、あるいは響き、あるいはその双方によって働く限り―リズムとハーモニーであると考えたのであるが、それは、あらゆるパイデイアーにおいて決定的な要素となるものは活発な精力（active energy, das Tätige 活発さ）だからであって、それは精神の教養（the culture of the mind, Bildung des Geistes）においては、身体的な強さと敏捷さを働かせる＜ agon 競技＞の場合よりもいっそう重要なのである。[(5)] ギリシア人の考え方によれば、美術（fine art, die Kunst）は異なる範疇に属していた。古典期全体をとおして、それは宗教の領域に位置を占めたのであって、それは宗教から生じたのである。本質的に絵画や彫像は、＜ agalma アガルマ＞[(6)]、装飾品であった。このようなことは英雄叙事詩には該当しないのであり、その英雄叙事詩から教育的な活力（educational energy, die erzieherische Kraft）が他のあらゆる種類の詩歌へと流れ込んだのである。詩歌が宗教と密接に関連したところでさえ、その根は深く社会的、政治的な生活の土壌に食い込んでいたのであって、このことは、詩歌よりも散文の作品おいて一層よく該当する。このようにギリシアの教養（culture, Bildung）の歴史は、本質的にはギリシア文学の歴史と一致するのであり、何故ならギリシア文学は、その最初の創造者によって意図された意味において、ギリシア人の理念が形をとる過程の（of the process by which the Greek ideal shaped itself, der Selbstformung des griechischen Menschen ギリシア人の自己形成の）表現だったからである。[(7)] その上、われわれは実際に、古典期に先行する諸世紀を理解する上で助けとなる文学の証拠は詩歌以外には持たないのであり、それゆえに、事実に関する意味でのギリシア史にとってさえ、実際に論議可能な唯一の主題は、詩や芸術に表現されたようなあの過程（that process, die Gestaltwerdung des Menschen 人間の型の生成）なのである。あの時代の全生活に関し他の何ものも生き延びることのないようにということが、歴史の意思である。われわれは、ギリシア人が明確な形を与え磨いた（shaped and cultivated, formten）理念（ideal, dem idealen Bild des Menschen 人間の理想像）を研究すること抜きには、あの数百年をとおして彼らの教養（the culture, der Bildung）の足跡をたどるということはできない。[(8)]

＜注記と考察＞

(1) ピンダロスΠ ι ν δ α ρ ο ς：前 512 年頃（あるいは 522 年頃）～前 438 年頃。古代ギリシアの代表的な抒情詩人で、ピュティア祭における競技の勝利の賛歌などがある。

(2) パルテノン神殿を想起すればよいだろう。

(3) この一文の訳はドイツ語原文に拠る。ただし時制は、英語訳の前後に合わせて過去形に直して表現しておく。なお、der Bildner は、「彫刻家・造形美術家」「教育者（Erzieher）」の両義をもつ。以下に、ドイツ語原文と英語訳とを引いておく。

ドイツ語原文【Nur der Bildner,der den lebendigen Menschen formt,hat auf diesen Titel ein spezifisches Anrecht.】

英 語 訳【The legislator alone could claim the title of sculptor,for he alone shaped living men.】（立法者のみが彫刻家の称号を要求することができたのであるが、それは彼のみが生きた人間を形成したからである。）

(4) ヴィンケルマン J.J.Winckelmann：1717 年～ 1768 年。ドイツの考古学者、美術史家で、

そのギリシア美術史の理解は、美術を超えて西欧世界に大きな影響を与え、ヘルダー、ゲーテ、シラー、ヘーゲルらのギリシア理解を決定したとされる。（『岩波　哲学・思想事典』1998 年）

(5) 古代ギリシア人は、美術にではなく、言葉と響き、そしてそれに関わる限りでの、リズムとハーモニー、に人間形成力を見ていたという。表現活動の中でも、言語に格別な人間形成力を認めるということは、人間の能力理解に関わって、道徳性と知性との関係、あるいは教育実践における生活綴方、詩の意味を考えることにも通じる。

(6) アガルマαγαλμα：飾り

(7)「ギリシアの教養の歴史は、本質的にはギリシア文学の歴史と一致する」と述べており、その理由は、「その（ギリシア文学の）根は深く社会的、政治的な生活の土壌に食い込んでいた」からだという。ギリシア文学史のこのような観方は、現代の（社会）教育・生涯学習の本質を考える観点ともなる。

(8)「教養」観念は、古代ギリシアにおいて、「理念（人間の理想像）」の意識化と同一の過程として形成されたという。

12. 危機の時代における古代学の課題

＜訳文＞

あの事実は本書の方法を規定し、目的を明確にする。そこで論じられる主題の選択とそれぞれの事例で採用される観点に対しては、とくべつな弁明はまったく必要ない。それぞれの読者は疑いもなく、これが抜けている、あれが抜けていると残念に思うだろうが、全体としてそれらは身の証を立てるに違いない。ここで新しい方法として出されているものは古くからの問題なのであり、というのは、教育（education, der Gesichtspunkt der Erziehung des Menschen 人間の教育の見地）はまさにその始まりから古代世界の研究と密接に関連してきたからである。[(1)] それに続く時代はいつも古典古代を知（knowledge, Wissens）と教養（culture, Bildung）の尽きない宝庫とみたのである―最初は、価値のある外的な事実と技術の収蔵物として、そして後には模倣されるべき理念（ideals, idealer Vorbilder 理念上の模範 ）の世界として。現代の古代学の（of modern classical scholaship, der modernen geschichtlichen Altertumswissenschaft 現代の歴史的な古代学の）興隆（rise, die Entstehung 発生）はそれと共に、考え方という点で、ある根本的な変化をもたらした。最近の歴史的な思考（historical thought, historischen Denken）は、主として、あるとき何が本当に起き、どのようにして起きたか、を見いだそうとしてきた。過去を明瞭に見ようとする情熱的な努力を傾けているうちに、歴史家は古典古代を単に歴史の一片（格別に興味深い一片ではあるが）とみなすことに陥ってしまったのであり、それが現代世界に直接的に及ぼしている影響にはほとんど注意を払わなくなってしまった。その影響を感じるか否かは、個人的な認識の問題となり、その価値を評価することは、個人的な好み（taste, dem Ermessen 裁量）の問題とされてしまった。しかしこの種の百科事典的で事実を重視する古代史研究の方法がますます一般的になっていくときに（その非常にすぐれた先駆者たちによって実践されるときでさえも、それは彼らが思っていたほど冷静でも客観的でも《dispassionate and objective, wertfreie 没価値的で》なかったのであるが）[(2)]、‘classical culture 古典的教養’（klassische Bildung）のある種のものが、それが自らの持

ち場を反論されることもなく保持しているのに、まだ実際に存在していると認める者はほとんどいなかったのである。かつてはそれを基礎づけていた古典主義者の（classicist, klassizistisches 擬古典主義の）歴史概念は、現代の研究によって粉々にされてしまったのであり (shattered, erschüttert)、しかも古代学 (classical scholarship, die Wissenschaft 学問) は、その理念を新しい基礎の上に再建しようと努力することをまったくしなかったのである。しかしわれわれの全文明（civilization, Kultur 文化）が、圧倒的な歴史的経験によって揺すぶられ（shaken, aufgerüttelt 揺り起こされる）、それ自身の価値を吟味し始めているという、この重大時に、古代学（classical scholarship, der Altertumsforschung 古代研究・古代学) はもう一度、古代世界の教育の価値（the educational value, erzieherischen Gehalt 教育の本質）の検討評価をしなければならない。これが古代学の最後の問題であり、それ自身の存続はその答えに依拠することになるだろう。それに答えを出すことは、ただ歴史学に拠り、史実に基づくことによってのみ可能となる。古代学（classical scholarship）の本分は、それゆえに、ギリシア人を調子よく理想化して描写することではなく、彼ら自身の知的で精神的な本性を研究することによって、彼らの不滅の教育的偉業（achievement）[(3)] と、彼らが、続いて起きるすべての文化運動（cultural movements, der geschichtlichen Bewegung 歴史的な運動）に与えた指導的な刺激（directive impetus, richtunggebenden Anstoß 方向を与える刺激）の、その意味を読み取ることである。[(4)]

＜注記と考察＞

(1) 古代ギリシアを近現代の教育の具体的な源と考えるか否かは、その教育の本質認識に関わって、今日的な教育・生涯教育（学習）研究の基本課題となるだろう。

(2)「価値自由 (wertfrei)」性を唱える歴史研究の潮流のことが言われている。イェーガーは、古典古代が現代世界に深甚な影響を与えているにもかかわらず、その事実を見ようとしない学問状況が生まれているとし、それは没価値的な歴史研究に因るのだと述べている。イェーガーが指摘していることは、古代認識をめぐる、今日の私たちの問題状況でもある。

(3) ドイツ語原文では das unvergängliche erzieherische Phänomen der Antike（古代の不滅の教育上の出来事）

(4) 古代ギリシア人たちの人間性の観念は、教養･教育の思想として洞察され、形をとっていった。それは、自ら生命力をもつかのように、いわば時空を超えて、世界史のなかで再生を繰り返してきた。いわゆる「ルネサンス」は、その再生の大きなうねりであるが、たとえば私たちの白樺派（明治末～大正）の芸術･教育の思潮も、ヒューマニズムの覚醒と人間形成の意識がその根幹にある。イェーガーは、この教養・教育の本質の成り立ちを、今日の課題として、歴史のなかで解き明かそうとした。

Ⅲ．全体の考察

「序論」のもつ重要な論旨は、イェーガーの論述の全体から学ぶこととし、ここでは、

今日の私たちの教育研究を意識しながら、「序論」の若干の特徴を確認しておきたい。

〔1〕先ず注目しておきたいのは、古代ギリシア人が掴んだ教養・教育の原理的な成り立ちについてである。

第１に、きわめて重要なことであるが、古代ギリシア人は、他民族にはみられなかったこととして、「理念を意図的に追求した」ということである。

このことは、すべてのギリシア芸術、文芸、自然哲学、数学、雄弁術、哲学など、「ギリシア人の基本的な知的態度を貫いて」認められることで、プラトーンのイデア論はその典型である。

イェーガーは、パイデイアーはギリシア史そのものとして形成されたと述べ、「しかしそのギリシア史の諸事実は、もしギリシア人がそれらを永遠の形相（form）―彼らの最高の意思の表現であり変化と運命に対する彼らの抵抗の表現であるもの―に形作らなかったならば、とっくに世に忘れさられていただろう。」と指摘する。そして、ギリシア人が自分たちの生活の目的を「優れた範型の人間を作り出すこと」と定義していく過程を指摘しつつ、「ギリシア人がギリシア精神の全達成を他の古代の諸民族に遺贈したのは、究極的には、パイデイアー、つまり ‘culture’（教養）という表し方をとってであった。」と述べている。

世界史はこうして、教養理念を共有財産としてもつことになる。

第２に、ギリシア人はたえず世界を「生きた全体」として見つめ、そこに貫く「法則」を発見していったということである。

このことについてイェーガーは、「ギリシア人の精神の際立った無理のない心の平静さは、世界は一定の理解可能な法則によって支配されているという事実（初期の民族には見えなかった）を明晰に理解することによって、生み出された。彼らは、自然というものについての天賦の感覚をもっていた。‘nature’（自然）という概念―彼らはそれを作り出した最初の人である―は、疑いもなく彼らに特有の心性によって生み出された。」と述べ、「生命の、自然な、成熟した、本来の、有機体的な構成を見抜くこの感覚は、現実の世界を支配する法則を発見し定式化しようとするギリシア人の本能―その本能は、ギリシア人の生活のあらゆる場面に、彼らの思考、彼らの演説、彼らの行為、そして彼らの全芸術に現れている―に密接に結びついている。」と指摘している。

ギリシア人は、現実の世界にはそれを支配する法則があるのに違いないと考え、それを見いだしていこうとしたのであるが、そのような構えは、自らの生き方や思考を見出される法則に沿わしめようとする態度のことでもあった。このことについてイェーガーは、次のようにも言い表している。

「どんな民族も法のおきてを生み出してきたが、しかしギリシア人はいつもすべてのものに染み渡る一つの法則（Law, ‘Gesetz’）を捜し求め、自分たちの生活と思考をそれと調和させようとした。彼らは世界のなかの哲学者である。」

第３に、ギリシア人は人間性の深い法則を見いだし、教育の原理認識を獲得したということである。

ギリシア人は、「普遍的なもの、＜ logos ロゴス＞（理性、道理）は、法が国家においてすべての市民に対するように、すべての心に共通だ」ということを見いだすのである。

このようにして、彼らは人間をも「内在的な法則」をもつものとして観察・探究し、教育の深い原理を掴んだのである。イェーガーは次のように述べている。

「教育の問題に接近するとき、ギリシア人は、人間生活を支配する自然の原理と、人が自分の身体的なあるいは知的な力を働かせるときに使う内在的な法則とをこのように明瞭に理解することに、全面的に信頼を置いた。そのような知識を、教育における形成力として使用すること、またそれによって生きている人間を、陶工が粘土をこね、また彫刻家が石を刻むように、前もって意識した形にすること―そうしたことは、芸術家であり哲学者であるあの民族によってのみ発展させることのできた大胆で独創的な着想であった。彼らが創作すべきもっとも偉大な芸術作品は、人間であった。彼らは、教育とは人間の人格を理念に従って意図的に形成することを意味するということを認識した最初の人である。」

この「教育とは人間の人格を理念に従って意図的に形成することを意味する」という命題は、教育についてのもっとも本質的な規定というべきだろう。

第 4 に、ギリシア人がつかんだパイデイアーが、古代ローマにおいてフーマーニタースとして受け止められ、それがヒューマニズムとして継承されたということである。
イェーガーは、次のように述べている。

「人間の発見というが、ギリシア人は主観的な自我を発見したのではなく、人間性の普遍的な法則をはっきり理解したのである。ギリシア人の知的な原理は、個人主義ではなく、そのことばを元来の古典時代の意味で使って、‘humanism ヒューマニズム’である。それは、＜ humanitas フーマーニタース＞から来ているが、それは、少なくともウァルロとキケローの時代以来、ここでは問題にならない人道的行為というその古い時代の通俗的な意味に加えて、より高貴で厳格な意味をもっていた。これは、人間をその真の形相へ、つまり真の本来の人間性へと教育する過程を意味した。これが、ローマの政治家に手本として取り入れられたギリシアの真正のパイデイアーである。」

そしてそのパイデイアーは、イェーガーによれば、「理念から発しているのであって、個人からではない。群れの一員としての人間の上に、あるいは独立しているといわれる個人としての人間の上に、人間は一つの理念として立つのであるが、その理念は、ギリシアの詩人たち、芸術家たちや学者たちのみならず、ギリシアの教育者たちがいつも目を向けてきた範型なのであった。」

以上のように古代ギリシア人は、人間性（human nature）の本質を、主観性を超えるものとしてとらえ、教育とは、人間をその人間性に則して育むことだと理解したのである。[(1)]

〔2〕二つ目に目を向けておきたいのであるが、イェーガーは、上述のような古代ギリシア思想がもつ画期性を述べながら、「われわれの歴史はギリシア人から始まる」という観方を繰り返し強調している。

イェーガーは、「われわれが真に文明（civilization, Kultur 文化）―つまり理念を意図的に追求すること―と呼び得る歴史は、ギリシアまでは始まらない」とし、そのような文化を共通とする限りは、「われわれの歴史はやはりギリシア人から始まるのである」と述べる。

その「始まる」ということの趣旨について、イェーガーは、「‘begins’（始まる）とい

うことばで、私は単に時間的な始まりだけを言っているのではなく、αρχη《アルケー：始原》、つまり、われわれが新しい発展段階に到達するたびに自らを新しく方向づけていくためにいつも立ち戻らなければならない精神的な源という意味でも言っている」と述べ、あるいは、「日々の使用によって最上のものさえ低俗化してしまうという危険が増大するほど、人間精神のより深い価値を理解する人間は、それが歴史的な記憶と創造的な天才の始まりのときに初めて形をとった独創的な形相にますます心を向けることになる」とも述べている。

このようにイェーガーは、ギリシア人の思想の画期性とその根源性について指摘し、「前ギリシア世界とギリシア人から始まる世界との間のきわめて重要な区別をはっきり理解することであり―その後者の世界において教養理念が形成原理として初めて確立されたのである」と、明確な画期性をもって歴史を観ることの重要性を述べている。

イェーガーの見地は、ギリシア以降のローマ帝国やルネサンスなど、世界史的事実に拠って考察されているが、さらに「ギリシア人が、その哲学的な発展の頂点において共同社会における個人の位置の問題を明確に表し解こうとしたので、ヨーロッパにおける人格についての歴史は彼らから始まるのに違いない、ということは歴史的に承認されるべきである」と論述されているように、近現代においても、古代ギリシア思想は原理として生きていると指摘されている。

以上のようにイェーガーは、古代ギリシア思想の理解においては、その画期性の認識が重要であると繰り返し述べているが、そこには、ギリシア人が掴んだ人間性理解が根源的なものとして現代社会でも生きて働いているという認識がある。

私たちは、この「われわれの歴史はギリシア人から始まる」という見地を、今日の教育（研究）の本質理解にかかわって、しっかりと受け止めるべきだろう。[(2)]

〔3〕三つ目に注目されるのは、イェーガーが、共同社会の維持・建設と教養・教育の成立との本質的な関係を繰り返し論じながら、ギリシア人が個人の価値を意識していく過程を明らかにしていることである。

イェーガーは、あらゆる部族に通じる一般的な事実として、「教育というものは、個人にのみにかかわる仕事ではなく、それは本質的に共同社会（Gemeinschaft、community）の一機能なのである」と述べ、とりわけ人間という社会的動物にとっては、「他のどのような動物の場合よりも遥かに、共同社会はすべての行為の源なのである」と指摘し、その上でギリシア人による教養理念の形成の特殊性（画期性）を論じていく。イェーガーによれば、その教養理念の形成は、あらゆる具体的な現実性において「ギリシア史そのもの」であった。そして古代ギリシア人は、「教育」を、「あらゆる人間の努力の目的を体現」するものとして、あるいは「個人と共同社会との双方が存在することに対する究極的な正当化」として考えたのである。

このようにして獲得されていった人間人格の理念について、イェーガーは、「彼ら（ギリシア人たち：訳者）が個々人を教育して獲得するよう望んでいた人間人格の理念は、時空の外に存在するような空虚な抽象的な範型ではなかった。それはまさにギリシアの土壌に成長してきた生き生きとした理念であり、その歴史と知的発展のあらゆる段階を同化しつつ、変化する民族の運命の起伏とともに変化した」と指摘する。さらにイェーガーは、「ギリシア人の精神の卓越した強さは、それが共同社会の生活に深く根ざして

いたという事実に負っている」とし、「偉大なギリシア人たちの作品から見えてくる人間は、政治的人間（a political man）である」と明言する。

イェーガーは、この「政治的人間」ということの深い意味について、「もっとも偉大なギリシア人たちはいつも自分たちが共同社会の奉仕者であると感じていたということは、創造的、芸術的、知的な生活と共同社会との間の密接な関係の一つの目印である」とも言い表している。つまり、ギリシア人たちは、「あの精神的自由の環境のなかで、深い知識に拠り（あたかも神の法に拠るかのように）共同社会の奉仕に結びつけられて」、個人主義的なものとは異なる、「高遠な教育理念」を「着想し獲得した」のである。

古代ギリシアの教養・教育の本性についてのこのような指摘は、たとえば、ホメーロスの叙事詩や、共同社会（ポリス）アテネの凋落を憂いたソークラテースの生き方とその思想に接するだけでも、それが正鵠を射たものであることは十分すぎるほど了解できる。

ギリシア人は個人の存在を、このような共同社会との本質的な関係をもつものとして、深く掴んでいったのである。イェーガーは次のように述べている。

「ギリシア人の歴史の始まりは、個人の価値という新しい考えの始まりであるように見える。そして、信念―キリスト教が広めようと最大限のことをなしたもの―つまりそれぞれの魂はそれ自体無限の価値をもつ一つの目的であるという信念こそ、また、ルネサンス期とそれ以降に公然と述べられた理念、すなわちすべての個人が自分にとっての法であるという理念こそ、あの新しい考えそのものだと思うことを控えるのは困難なことである。」

このようにギリシア人は、共同社会と本源的な関係をもつものとして人間の探究を進め、「個人の価値」の絶対性を掴んでいったのである。ギリシア人の、この「個人の価値」の認識について、イェーガーは続けて次のように指摘する。

「ギリシア人の人間人格の価値の認識なくして、どうして（近代が与えている）個人の価値と重要性を要求する権利が正当化され得ようか。」(3)

〔4〕四つ目に、イェーガーは自らの研究の主旨にかかわって歴史認識の問題を論じている。

イェーガーは、「われわれよりも早い世代の古典主義者や人文主義者」は「歴史を無視し、ギリシアや古典古代の ‘humanity 人間性’ や ‘culture 教養’、‘mind 精神’ を、絶対的な時間を超越した理念として解釈した」と指摘し、「歴史的な目をもって見る」ことの重要性を述べている。イェーガーは同様に、次のようにも述べている。

「われわれはもはや、ギリシア文学の歴史を、＜ in bacuo 空の状態＞で、つまりそれを生みそれを受け取った社会から切り離された状態で、読んだり書いたりすることはできない。ギリシア人の精神の卓越した強さは、それが共同社会の生活に深く根ざしていたという事実に負っている。」

このように、古代を歴史的な目をもって見ることを重視するイェーガーは、同時に、相対主義的、あるいは実証主義的な「新しい歴史観」をつよく批判していく。その批判の見地を、イェーガーの若干の文章で確認しておこう。

「われわれは culture（カルチャー）という言葉を、ギリシア人中心の世界のみが保持している理念を表現するものとしてではなく、ずっと瑣末な一般的な意味において、最

も原初的なものであれ、世界のすべての民族に備わっている何ものかを示すものとして、使うようになってきた。われわれはそれを、どの民族も特色づけていく、すべての生活の様式と表現の複合体の全体として用いている。このようにこの言葉は、価値的な概念、つまり意識的に追求される＜ ideal ＞（理念）ではなく、単なる人類学的な概念を意味するまでに低下してしまった。」

「この人類学らしき意味における歴史は、真の生き生きとした精神的な同族関係、それが一民族の内部であれ小グループの民族の内部であれ、にもとづく歴史とは区分されなくてはならない。この種の歴史においてのみ、ある民族やある時代の内的な本質の真の理解を、また観察する者とされる者との間の創造的な接触を、成し遂げることが可能となる。」

このようにイェーガーは、人類学的な culture（カルチャー）の用法は、その語の本来の意義を失わせており、したがってこの用法では、ある部族、ある時代の、本質的な精神を探究していくことができないのだと批判している。

同様の趣旨であるが、イェーガーは、古典古代が現代世界に直接的に及ぼしている影響のことを述べ、実証主義的、相対主義的な思考法はそれへの関心そのものをもっていないと批判し、次のように述べている。

「最近の歴史的な思考は、主として、あるとき何が本当に起き、どのようにして起きたか、を見いだそうとしてきた。過去を明瞭に見ようとする情熱的な努力を傾けているうちに、歴史家は古典古代を単に歴史の一片（格別に興味深い一片ではあるが）とみなすことに陥ってしまったのであり、それが現代世界に直接的に及ぼしている影響にはほとんど注意を払わなくなってしまった。その影響を感じるか否かは、個人的な認識の問題となり、その価値を評価することは、個人的な好みの問題とされてしまった。」

イェーガーは、このような批判意識をもちながら、「歴史学に拠り史実に基づく」方法を重視する古代研究を進め、古代の価値を現代的に問う考察を試みていったのである。「序論」の結論部において、イェーガーは次のように書いている。

「かつてはそれ（古典的教養：訳者）を基礎づけていた古典主義者の歴史概念は、現代の研究によって粉々にされてしまったのであり、しかも古代学は、その理念を新しい基礎の上に再建しようと努力することをまったくしなかったのである。」

「それ（古代世界の教育の価値の検討評価：訳者）に答えを出すことは、ただ歴史学に拠り、史実に基づくことによってのみ可能となる。古代学の本分は、それゆえに、ギリシア人を調子よく理想化して描写することではなく、彼ら自身の知的で精神的な本性を研究することによって、彼らの不滅の教育的偉業と、彼らが、続いて起きるすべての文化運動に与えた指導的な刺激の、その意味を読み取ることである。」

このようにイェーガーは、古代ギリシア思想の結晶であるパイデイアーの、その生きた本質をつかむために、非歴史的、および相対主義的な態度・方法を批判し、歴史的な方法による古代研究に向かったのである。[(4)]

＜注記＞

(1) イェーガーによれば、ヒューマニズムは、古代ギリシアのパイデイアー、つまり「人間をその真の形相へ、つまり真の本来の人間性へと教育する過程」を意味する。こ

の、パイデイアーとヒューマニズムとが歴史的・本質的に同一であるということは、ヒューマニズム理解、および教養・教育理解の双方にとって、その後の歴史の問題としても、今日の問題としてもきわめて重要なこととなる。

(2) 古代ギリシアの教養理念の成立に画期性を認めようとする見地に関連して、教育研究上の二、三の検討課題について簡略に述べてみる。

1. イェーガーの古代ギリシア認識に触れるとき、宮原誠一の「社会教育の本質」（1949年）、「教育の本質」（1949年）が想い起される（『宮原誠一教育論集』第一巻、1976年、第二巻、1977年、国土社、所収）。それらの論文は、観念性のつよい教育研究の傾向を批判し、その科学性を高めていくことを意図して執筆されたと判断されるもので、貴重な理論的貢献となっており、発表以来今日まで多くの論評がなされてきた。しかしその宮原の論稿は、教育本質論としてある難解さを感じさせるものとなっている。その難解さの意味であるが、宮原の教育本質論には、イェーガーのような古代ギリシアに画期を観る認識はなかったと判断される。イェーガーの古代研究に学びながら宮原の論稿を検討することは、今日の教育・社会教育の研究にとってフレッシュな意味をもつだろう。
2. 一般に教育の「出発」= 根源をどう考えるかは、現代教育の矛盾の本質をどう理解するかということに関わり、したがって教育の実践構想やその評価にまで直結していくことになる。つまり原理への問いは、いつも私たちの身近に切実なものとして在る。この根源への問いは、「徳（性）」「道徳（性）」の成り立ちを人間性（human nature）理解と不可分のものとして考究していこうとするとき、切実さを増す。人間の「個人」の尊厳や「正義」「自由の精神」、あるいは「教養」「知性」などの本質的な認識を社会の共通の理解としていくためには、歴史的・原理的認識はどうしても欠かせない。
3. イェーガーは著書『パイデイア』において、古代ギリシアにおいて教養理念が見出されたとき、「教育」意識は子どもたちの訓練を超えて若者の教育へ、さらに「全人生」の教育へと拡張されたと述べている。この指摘は重要で、主観をこえるものとしての教養の前に、大人も子どもも平等な存在として立つことになる。つまり、近現代的な生涯学習の認識は、古代ギリシアを源とし（＝教養意識を核心とし）、それぞれの世代が相互を人間として発見していくという本質を含んで成り立っている、と理解される（拙論「教育学と教養理念の起源に関する研究―W. イェーガーの『パイデイア』から学ぶ―」（都留文科大学大学院紀要第15集、2011年3月、所収）。

(3) イェーガーは、共同社会の維持・建設と教養理念の成り立ちとの本質的な関係を指摘しているが、そこから次のようなことを考えることができる。

1. 古代ギリシアの教養・教育の思想は、ギリシア文化・思想の一分野というよりはその総体のエッセンス（「ギリシア史そのもの」）というべきである。つまり私たちが教養・教育の思想をギリシアから学ぼうとするときは、その歴史におけるギリシア人の共同社会建設の格闘に目を向ける必要があるということであり、また今日の教養・教育の思想を探究していくときには、私たちの時代の、共同社会を建設しようとするさまざまな格闘に目を向けなければならないということである。

このことについてイェーガーは、「いかなる未来のヒューマニズムも、すべてのギリシアの教育の基本的な事実―ギリシア人にとって人間性は、いつも人間存在の本質的特質、つまり人間の政治的な性質を含んでいたという事実―に基づいて建設されなければならない」とも述べている。この指摘はまた、古代社会以降に世界史、日本史が経験してきたヒューマニズムの、その諸潮流のなかの、主観的、個人主義的な傾向がもった「弱点」の本質を示唆してもいる。

2. イェーガーによれば、古代ギリシア人は「教育」を、「個人と共同社会との双方が存在することに対する究極的な正当化」として考えたという。このようにギリシア人は、個人を共同社会と本源的な関係をもつものとして理解し、その価値の絶対性を掴んでいったのである。このことを理解するのには、ソークラテースの対話の実践（思想）と都市国家アテネとの関係（プラトーン『ソークラテースの弁明』）を思い浮かべればよいだろう。

　イェーガーは古代学の課題を、「彼らが、続いて起きるすべての文化運動に与えた指導的な刺激の、その意味を読み取ること」と述べているが、それは私たちの教育研究の課題でもある。

(4) イェーガーは古代研究の方法の問題を述べ、culture 概念そのものが変容していったと指摘しているが、それは、今日の教育研究の複雑な様相を照らすものとなっている。

　イェーガーが提示している研究方法の見地は、錯綜する culture（教養・文化）理解があるなかで、私たちに次のようなことを考えさせる。第一に、価値的な意味をもつ教養の理念そのものを探究していくことは、私たちの共同社会の中心的な課題だということ。第二に、社会教育と学校教育は、自由な環境を前提に、教養の探究を中核的に担っていると考えられること。第三に、パイデイアー（教養・教育）の思想は、そのものの成り立ちとして、人間性（human nature）の開花と一体のものとして理解する必要があること。

Received date:Dec. 05, 2014
Accepted date:Dec. 08, 2014